2008
graph magazine vol. 14

主は、生きておられる

Unser HERR lebt



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません
（ヨハネ3･3）

vol. 14 定価100円（本体95円）

巻頭メッセージ 004
主イエスの「みからだ」である教会 ― ゴットホルト・ベック

3人のメッセージ 020
イエス様のサイン ― 松見敬三 030
人にはできないことも、神にはできるのです ― 小島勝巳 040
ただイエス様に頼ればいいのです ― 加藤正道

7人の証し 050
主のことばに生かされて ― 岡本恵以 054
苦しみに会ったことは、しあわせでした ― 根本都 059
イエス様は今、私の生活の中心になっています ― 石黒郁彦 063
すべての事に感謝して前に進みたい ― 石黒まり 069
妻の死で私は砕かれました ― 春木一郎 073
私たちは、主の光のうちに光を見る ― 古田康子 079
私の助けは、天地を造られた主から来る ― 大口真砂子

写真集 084
よろこびの集い［2007年後半］ 086
「聖書は何と言ってますか」2回目 ― ゴットホルト・ベック

各地の集会から 104
こちら近江八幡集会で～す 106
インフォーメーション・ボックス
ロス・キャンプとヨハネ3章16節／イエス様を実感した車内の出来事
ご存知ですか、パッション・フラワー（受難の花）
日曜礼拝配信のお知らせ／集会ホームページの案内／原稿募集の記事―次号の特集「家庭集会」

メッセンジャーの予定表 110
ビッキーのケーキづくり［しずんだ キルシュクーヘン］ 112
メッセージ当番表（2008年7月～9月） 116
結婚式・葬儀 118
キリスト集会へのご案内 120
キリスト集会出版物のご紹介 122
キリスト集会のご案内（2008年4月1日現在）

住所録

主イエスの「みからだ」である教会

ゴットホルド・ベック

現代の多くの教会は、パウロが主から受けた啓示を忘れてしまっているのではないでしょうか。現代の組織された教会は、果たして聖書に照らして良しとされる姿になっているのでしょうか。

多くの信者たちが教会のリバイバルを求めて祈りを捧げているのに、主イエス様はどうして答えようとなさらないのでしょうか。主から見て、満たさなければならないものが、何か不足しているのでしょうか。

どの時代にも、「主のみこころを実現する者だけに祝福がある」ことが、聖書にはっきり記されています。多くの信仰者たちがこれについて真剣に考えています。聖書は教会に対する主のご計画について、次のように語っています。

神は・・・みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。（エペソ 1・9〜10）

神である主のご計画というのは、御子であられる主イエス様の「からだである教会」にあります。もし私たちが、主のみこころを啓示によって見せていただくことができるなら、私たちには聖霊の満たしがあり、私たちの奉仕は永遠の実を結ぶことができます。

ですから、私たちは主のみこころを知ることができるように熱心に祈りましょう。今の時代における神様の主な目的は、「主イエス様のみからだである教会」にこそあります。聖書にある「教会」の意味は、本来、「主イエスを頭とするみからだ」です。いわゆる人間によって組織された教会制度、その建築物、会員制度などを指してはいません。このメッセージ中の「教会」という言葉も、あくまでこの意味で使ってあります。

これから、次の三つの点について考えて見たいと思います。第一は「三位一体の神の永遠のご計画について」、第二に「三位一体の神の愛の働きについて」、第三に「救いの対象である教会について」です。



1. 三位一体の神の永遠のご計画

まず、神の永遠のご計画について考えてみましょう。私たちが聖書を通して主のみこころをはっきり悟ることができることは、何と素晴らしいことでしょうか。聖書の次の箇所に、主のみむねが「永遠」のご計画であることが書かれています。

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。（エペソ 1・4）

神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。（2テモテ 1・9、10）

それは、偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださった永遠のいのちの望みに基づくことです。（テトス 1・2）

主のご目的は、「主イエスのみからだである教会」にあります。過去、未来の全ての時代が、今、私たちの生きている「この時代」にかかっています。「この時代」とは、五旬節から教会の携挙―主イエス様の空中再臨―にいたるまでの特別な時代です。

この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。（エペソ 3・5）

万物を創造された神の中に世々隠されていた奥義・・・（エペソ 3・9）

これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現わされた奥義なのです。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

（コロサイ 1・26、27）

旧約時代の信者たちはみな、「この時代」を待ちわびていました。永遠の昔から永遠の未来にわたる主のご計画は「主イエスのみからだである教会」にあります。そして、私たちはこの永遠のご計画が実現されるために一番大切な時代に生きており、主の同労者として召されているのです。

2. 三位一体の神の愛の働き

まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。（詩篇 33・9）

神である主は、天地創造を、ご自身の「命令」によって成し遂げられました。しかし教会を建て上げることは、命令ではなく、主の「愛の働き」をもってなさいます。神は最初の人アダムを一人にしてはおかないで、彼のために助け手をお造りになりました。これは天国の象徴です。主は天国のものを示すために、いつもこの世のものを通して語られます。

私たちはキリストのからだの部分だからです。「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

（エペソ 5・30～32）

同じようにイサクも十字架につけられ死からよみがえらられたイエス様の象徴です。アブラハムは神様のご命令により、全焼のいけにえとしてイサクを捧げました。その後、彼は只一つの願いとして、息子イサクのために妻を迎えようとしました。そのため、アブラハムの家の全財産を管理していた召使が、イサクの婚約者を迎えるために遣わされました。今日、この召使の務めをはたすのは聖霊です。聖霊の目的は主にあり、神様のご計画は主イエスの許嫁である、「からだである教会」にあるのです。創世記からヨハネの黙示録まで聖書にはこれが明示されています。

また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。素晴らしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。（マタイ 13・45、46）

この真珠を求めた商人は、主イエス様を象徴し、高価な真珠は教会のことです。商人は持ち物全部を売り払って真珠を買い求めました。主イエス様は教会を買い取るためにいのちを捨てられました。神である主の永遠のご計画であり、最大の関心は、主イエスの許嫁、つまり、主イエスのみからだである教会にあるのです。

主イエス様は、十字架への道、エルサレムへ向う途中、弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」とおたずねになりました。ペテロは上からの啓示によって、「あなたは、生ける神の御子キリストです」と告白しました。すると、イエス様はペテロに「あなたは幸いです」と答えられたのです。（マタイ16・15～17）

なぜ、主イエス様はこのペテロの告白をそれほどお喜びになったのでしょうか。それは、この信仰の告白が教会の土台となるからです。

主イエス様は教会を見いだすために、ご自分のいのちを捧げられました。今も、いつまでも、主イエス様のみこころは、ご自身の「みからだである教会」の上にあるのです。

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように・・・（エペソ 5・25）

3. 救いの対象である教会

私たちひとりひとりが、救いを自分のものとしなければならないのはもちろんですが、主のご計画、主イエス様のみこころ、聖霊のみむねが教会全体に対するものであることを忘れてはなりません。教会を贖う代価は

十字架でした。よく知られているように、「エペソ人への手紙」の主題は「主イエスのみからだである教会」です。

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

・・・私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。

・・・聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

（エペソ 1・7、11、14）

この箇所で、パウロはいつも「私たち」という複数形で記しています。

また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。（エペソ 2・16）

もし、私たちが、「主イエス様は私たちを愛し、そのためにご自身を捧げられた」と言えるなら幸いです。しかしそれだけでは十分ではありません。自分に与えられた恵みだけを考えて、主が救いによって何をお受けになったかを考えていないことになります。というのは、主はご自身のために、教会を買い取られたのです。

あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。（使徒 20・28）

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、（エペソ 5・25）

救いによって主が受け取られたものは、私たちが受け取ったものよりも大切です。私たちが受けた祝福より、主ご自身の喜びと満足の方が大事なのです。そして神である主の満足は、個人個人の信者よりも、「主イエスのみからだである教会」を見ることにあります。

教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

（エペソ 3・21）

私たちの与えられている望みについて聖書はこう言っています。

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。

花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」

御使いは私に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」と言い、また、「これは神の真実のことばです。」と言った。（黙示録 19・6～9）

ここに出てくる「花嫁」とは、主イエスのみからだである教会です。神のみことばである聖書は、多くのことを教えています。例えば、回心の必要性、また聖くされることの大切さ、また、成熟への道の厳しさについてです。なぜなら、実を結ばない人生はあり得ますし、備えられている冠を失うこともあるからです。

もし毎日の生活において、私たちの考え、感じ、志すことを聖霊に支配していただけるなら、その人は幸いです。そうなって始めて、私たちは主イエスと共に遺産に与り、支配する者となれるのです。

ここで、主のみこころにかなった教会がどういうものか、聖書を見てみましょう。

ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。

（マタイ 16・18）

ここに述べられている教会は単数形ですが、次の聖句に出てくる教会は複数形です。

それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。（マタイ 18・17）

「教会」とは、まず第一に、「主イエスにある信徒の集まり」であり、「時間や空間を超越した世界的なつながり」を指します。この教会は目には見えません。第二の意味は、「時と場所に限定されている地域教会」です。この教会は目に見ることができます。前に見たマタイ16章18節に出てくるのは、「目に見えない教会」であり、同じくマタイ18章17節に出てくるのは「目に見える教会」です。「目に見えない教会」は、人間的に組織されていないものであり、「見える教会」は、主イエスに属する有機体である地域的な集まりです。ですから、聖書による教会は、主を信じている世界中の兄弟姉妹が一カ所に集まることができないので、各地方に分かれて教会を建て、集まるのです。この意味においてのみ、教会があちらこちらに分かれて存在することが許されるのです。聖書に出てくる教会は、エルサレム教会、ローマ教会、コリント教会など、その土地の名前がつけられています。

聖書で「教会」ということばが出てくるとき、それは主イエスに召された者の集まりであり、共に祈りをし、共に生活をする集まりです。それは決して一つの教派、団体の集まり、また建物などを指すのではありません。

それぞれの地域の集会は、その秩序においてまったく独立しています。しかし、他の集会が助けを必要としているときには助けますし、また他の集会に嬉しいことがあるときは共に喜びます。こうして、お互いに助け合っています。

主のみこころは「主イエスのみからだである教会」にあります。主ご自身が、この「教会」について私たちの心の眼を開いてくださるよう祈り求めましょう。主の考えておられる教会がどんなものかが分かるなら、信仰の成長も速くなるに違いありません。

主は、私をドイツでいろいろな教会の交わりのグループに導かれましたが、日本に来る前、イギリスでもあるグループと出会いました。そのグループの中心となってのをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ 1・23）

主のみこころは、活動的な有力者が多くいる集まりなどではなく、「主にある聖い宮」、また「霊なる神の住まい」を求めておられます。主は、信徒たちの群衆よりも、神のひとり子主イエス様のための許嫁を探しておられます。

この主イエスの満たしを現わす一つになった集まり、この霊である神の住まい、主イエスの許嫁こそが主のみこころにかなう教会です。ぶどうの木の枝、また主にある聖なる宮の石、ご自分のからだの肢体こそが教会です。これをよりよく知るために、二、三の聖句を読みましょう。

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。

わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ 15・1〜5）

ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味

わったのです。

主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。

あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。（1ペテロ 2・1〜5）

そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。

わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ 10・7〜11）

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。」（黙示 21・2、3）

ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。・・・

あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。（1コリント 12・12、27）

聖霊の宮とされた人々、また主イエスのいのちにあずかるようになった人々が「教会」なのです。「教会」とはギリシャ語で「エクレシア」、つまり、「呼び出された、引

いたオースチン氏について話しましょう。彼はそれ以前に、イギリスで毎年行なわれている、あるクリスチャンの大会のスピーカーの一人であり、メッセンジャーでした。この大会のいつものテーマは「オール・ワン・イン・クライスト」、つまり、「私たちは主イエスにあってみなひとつ」でした。その大会中一週間、主にある兄弟姉妹たちと共に過ごすことは、かけがえのない楽しみでした。しかし、この兄弟は、ある時から非常に心を痛めるようになったのです。なぜならその一週間、ひとつになることは確かに素晴らしいことであり、喜びがあったのです。しかし、その大会が終った後で、ある教会から信徒が数人離れて、別の教会へ行くようなことがありました。このことで牧師同士が妬んだり、攻撃し合ったりしました。ですから、主イエスにあってみなひとつになるということが、どれほど困難か、多くの場合は夢を追うようなものだと言うことを体験しました。

この後、彼はその大会に行くのをやめ、廃校になった小学校を買い求めて小さな集会を始めました。日本に来る前に私はその場所で三カ月間過ごしました。その頃は、毎週日曜日に千人以上集まり、その集会から三十六人の宣教師たちが全世界に遣わされたのです。

私は日本へ来る途中で、彼に紹介されたマニラ、シンガポール、香港、中国の集会に立ち寄りました。そして、それこそが私にとって「実物教育」となったのでした。その集会は生き生きとしていて、牧師制度も、会員制度も、献金制度もない集会でした。

日本でも、主はこのように働こうとしておられるのではないかと私は思うようになり、祈り続けました。その結果、所属していた団体から離れることになりましたが、主は大いに恵みをほどこし、祝福してくださったのです。集会は大きく広がり、今では主の口となり、主の足となる兄弟姉妹がたくさん与えられていることは本当に恵みそのものです。

「主のみからだである教会」とは、一体何を意味しているのでしょうか。

主のみこころは、救われた罪人の群衆ではなく、主イエスの満たしを現わす「一つになった教会」です。

教会はキリストのからだであり、いっさいのも

き抜かれた者」という意味です。それは、群衆の中から呼び出された者たちの有機体です。エジプトから呼び出されたイスラエルの民と同じように、教会は悪魔の奴隷から解放された者たちの集まりです。

神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。（使徒 15・14）

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。（エペソ 2・4〜6）

主の御名を呼び求める者は救われ、救われた者たちは「主の教会」と呼ばれます。そして、主イエスと共によみがえらされ、主イエスと共に天の所にすわらされた人々こそが教会なのです。

4. 教会が「一つになること」

最後に教会が、「一つになること」について少し考えてみたいと思います。「一つ」には、生物学的な同一性という意味もあり、また有機的な統合という意味もあります。

まず、生物学的な同一性とは何でしょうか。例えば、動物にはいろいろな種類がありますが、それぞれが区別できる動物固有の生命を持っています。また、すべての人間には、人間独自の血液が流れていて、これもまたひとつの同一性を生んでいます。

さらに、同一性は、動物や生まれながらの人間の間にあるだけではなく、主にあって新しく生まれ変わった人々の間にもあります。

からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。（エペソ 4・4〜6）

あらゆる時代の信者たちはみな、主イエスにあって神のいのち、つまり、初めからある永遠のいのちをもっています。

主イエス様が聖霊によって信者たちの内に住んでおられることが、教会が一つであることの土台です。

またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたことととを、この世が知るためです。（ヨハネ 17・22、23）

信じる者はみな、恵みによって、信仰によって救われました。そして、信じる者はみな、栄光を与えられるのです。

神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。（ローマ 8・30）

しかし、「一つになること」と「画一性」とは違います。

太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。（1コリント 15・41）

栄光を与えられる信者たちの間にも区別があるのです。「教会」は主と信徒たちが有機的に一つに結びついている主のみからだなのです。

ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。（1コリント 12・12）

このみことばにある「キリスト」とは、主イエス様ご自身を表わすと同時に、頭とからだとが完全に一つになっている状態、つまり主イエスと信者たちみなを意味しています。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ 1・23）

これが、有機的に一つになることの意味です。主イエス様は頭で、主イエス様と同じいのちをもっている兄弟姉妹みなが、からだの肢体です。生まれ変わった人々はみな、主イエス様と有機的に一体となっているのです。

私たち人間のからだは、全身に血が流れています。ですから、私たちは自分の両手は体に属していない、と言うことができないのです。体の肢体全部が同じ生命の血によって互いに結び合わされているからです。

また人間のからだは、血によってだけでなく、神経によっても制御されています。神経系統は、全身の機能を監督しますが、この神経系統の中心は頭です。したがって、足の痛み、また手の傷はすぐに脳に伝わり、痛みを覚えるのです。この神経系統によって体の全肢体が制御されているのです。血液の流れが一瞬止まっただけでも、全身でそれをすぐに感じるでしょう。同じように、一人の信徒の信仰生活がおかしくなったら、教会全体がそれを感じるでしょう。わずか二人の信者であっても教会の一体化から外れると、教会全体が前進しません。旧約聖書にも、アカンの罪によってイスラエルの民が前進することができなかったことが記されています（ヨシュア7章）。私たちの肢体のどこか一部だけでも病んだとしたら、そのときは体全体が病気になるのです。

教会、つまり信じる者がみな、ひとつになったとき始めて、主イエスのいのちが絶え間なく無条件に流され、初代教会のように主イエスの満たしを現わすことができます。

しかし悪魔は、「信者が一つになること」を憎んでいますから、全時代を通して、このような主と一体化した教会を破壊しようと攻撃を続けています。この悪魔のたくらみによって、初代教会のアナニアとサッピラは悪魔の道具となって大きな罪を犯してしまいました（使徒5・1〜10）。アナニアとサッピラを通して、悪魔が、主の宮、つまり教会の一致を破壊したとき、主からおそろしいさばきが下されたのです。主はご自身の宮を破壊する人々を滅ぼしてしまわれます。主イエスのみからだである教会が主の目指しておられる目的、またみこころですから、これを破壊する者に対するさばきは厳しいものです。主はその人を滅ぼす、と記されています。

私たち主に救われた者ひとりひとりは生きておられる主の宮であり、住まいです。

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。（1コリント 3・16、17）

私たちの肢体は血液によって有機的なつながりをもっています。同じように、私たち主にあって救われた者は、聖霊の働きにより、主のいのちによって主イエス様と有機的に一つとなっています。

また、体の肢体は血によってだけでなく、神経によっても制御されています。主イエスのからだの神経系統は聖霊です。主イエス様を受け入れた人々はみな、聖霊の宮です。そして聖霊の使命は、信者たちに主のみこころを知らせることです。そうなって始めて、主イエスのからだが実際生活において「一つになる」ことができるのです。信じる者が一つになることによって、リバイバルを経験します。けれども、隠された罪が一つでもあるなら、教会は主イエスを現わすことができません。私たちの間に、聖霊によってではなく、自分の考えによって生活する者が一人でもいれば、聖霊を悲しませることになります。聖霊によって私たちの心の眼が開かれ、「キリストのみからだである教会」の意味とその素晴らしさについて、また、教会が「一つになること」について、みことばが多くを語ってくださることは、何と幸いなことでしょう。■

イエス様のサイン

松見敬三

停に行ったとしても同じことは決して起こらないでしょう。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」（伝道者3・11）というみことばを思い出しました。

神はある方法で語られ

タイミングといい、内容といい、余りにも見事な符号に目に見えない方の存在を覚え、「わたしは生きて働いているよ」と、主はサインを送って励ましてくださったと思いました。ほんとうに私たち夫婦は密かに励まされて嬉しくなりました。しかしこの話については「偶然だ」とバッサリ切り捨てられてもいいのです。主のサインはもっと普通の生活の中で私たちの心に送られていて、しかも「神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない」（ヨブ33・14）と書いてある通り、私たちはそれに気が付かないだけで、こちらの方がよほど重要です。

面白くない事柄の中で

人は歳をとるほどに過去を振り返るようになり、その内容はと言えば面白いこととそうでないことが織り交ざっています。そのときはそれぞれに楽しんだり悩んだりして過ごしてきましたが、私たちが立ち止まって自分の人生について真剣に考えてみるとき、確かに自分にとって面白くなかったことの中で、イエス様はサインを送られていたことに気が付くのです。私たちが自分の都合ばかりを思わずにいれば、きっとその渦中でも主のサインに気付くのでしょう。悩みの中で主を見上げて、それが主のサインであることを見落とさずに「主よ、どうしたらいいですか」と言って自分を離れてへりくだるときに主は私たちの魂を守り導いてくださるのです。そして自分の魂が主によって永遠に守られる、ということ、これは誰にとっても大事なことではないでしょうか。

驚き怪しむことなく

主のサインである苦しみや悩みだけが私たちの魂をこの世から守る、これが主に救われた者の確信です。ですから「私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています」（詩篇143・5）とあるように、過去のことをみことばに従って捉えることは、自分の人生の肯定と主に対する信頼につながります。そしてこの先の人生でも、私たちの魂を守るためならば主は容赦なく何でもなさるので、もし試練を与えられたら主のサインと受け止め、「驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい」（1ペテロ4・12、13）というみことばに信頼したいものです。

はじめに

イエス様は十字架で私たちの罪を赦してくださった。イエス様は復活して今も私たちと共におられる。聖書のこの福音は私たちの救いであり永続する喜びと平安そのものです。そのイエス様は私たちの日々の生活の中で「いつもあなたがたとともにいる」と、サインを送っておられます。

万華鏡の一度だけの模様

昨年のことですが、これはもう二度とあり得ないような小さな出来事の中にそのサインを覚えました。それは万華鏡が回転する度にただ一度だけの模様を見せるのと似ておりました。家内が万華鏡を見つけて5歳の孫に覗かせたのは今年のお正月、それをくるくる回してやると、孫は大変きれいだと歓声を上げて喜んだので家内は買い与えました。万華鏡というものは、覗きながら回すと次から次へと模様が現れて、しかも二度と同じ模様にはなりません。きっと仮に何千回まわしても、一度見た模様と完全に同じ模様がもう一度出るということはないのでしょう。

母の葬儀の日に

昨年一月、私の母の葬儀参列のため横浜市磯子区のバス停にいた私の六十八歳の従姉が隣の人の読む本に何気なく視線を移したとき、開かれていたページに私の名前があるので驚いて、「何が書いてありますか」と尋ねると、会社が倒産して云々、今は元気に暮らしている云々、とその人は説明をしてくれたそうです。その内容からしてその本は「光よあれ」の第2集だったようです。

聖書にのっとって行われた葬儀の日、二十数年ぶりで会った従姉はこのことを不思議そうに私たちに話してくれました。その従姉にはあとでその本を送りましたが、この話は万華鏡の模様と同じく、不思議でもあり素晴らしくもあるただ一度きりの見事な組み合わせとして私たち夫婦の心に残りました。このあと従姉が何度同じバス

罪意識という主のサイン

確かに、主にある私たち兄弟姉妹の証しは、面白くないことの中でこそ主が私たちの魂を守ってくださり、感謝と喜びに導いてくださったというものです。そして、そこに共通していることは、そのとき自分の罪の性質がはっきりと示された、ということです。確かに罪意識は齢をとれば誰にでも与えられますが、それが主からのものであると気が付くのは、悩みの中で主と出会ったときです。そして罪意識は主とともに歩みながら深まっていき、遂には「私はほんとうにみじめな人間です」とパウロとともに言わねばならなくなります。しかしこの罪意識こそ主の恵みのサインと言わねばなりません。

自分の罪の性質について私たちは自分ではなかなか気が付きません。悩みや試練という形で主のサインが送られて初めて気が付いて、心の中で赤面したりどぎまぎして、時には甚だしく落ち込み、心の中は闇に閉ざされたりします。しかしそうであってもやはり自分の罪の性質をはっきりと知らされる、ということは主からの大きな恵みです。私たちはそれを知って初めて主の十字架は自分のためであることに心が開かれて魂の救いをいただくのです。

「ペテロは・・イエスの言われたあのことばを思い出した。そう

して彼は・・激しく泣いた。」（マタイ26・75）と聖書に書いてありますが、主は前もって伝えておいた鶏の鳴き声というユニークなサインでペテロに自分の卑劣な心に気が付かせ、その恥と悩みとまっ黒な悲しみを通して彼にまことの弟子となる恵みを与えられました。ペテロにとっても、自分の恥ずかしい罪の性質をはっきりと知らされることは、主からの第一の恵みであったのです。

悔い改めの事実というサイン

自分の罪の性質に心の目が開かれて、悔い改めて、人生を根本から変えるなどという、人間が編み出したどのような教育も成し得ないことを主はたちどころに実現します。人から説得されて罪を心から悔い改める人は、多分一人もいないと思います。ところが主の啓示は私たちをまことの悔い改めに導き、救いを与えるのです。そしてこの悔い改めの事実こそ、主が生きて働いておられる証拠です。

みことばの啓示によって自分の罪の性質に心の目が開かれ、砕かれて落ち込んだ者は、主の十字架を心で見上げて、それが確かに自分の罪のためであったことを悟り、感謝しながら主を畏れるようになります。そして主が生きておられることを実感し、自分の魂が守られていることを実感して嬉しくなり、歳とって行くほどに将来に希望を持ち、この世のことより天の御国を楽しみに思うようになるのです。

「私はほんとうにみじめな人間です。・・（しかし）私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します」

（ローマ7・24、25）

このみことばを自分のものとして受け取って嬉しくなった者は誰でも、これを生涯決して手放すことができません。

毎日の普通の生活の中で「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいる」（マタイ28・20）ことを示す主のサインが送られています。そして大事なのは、そのサインを見落とさず、または見ないふりをせず、どのような小さなサインでもへりくだって受け止め、主を見上げることです。

たとえば対人関係の中で

世の中で暮らすこととは対人関係そのものであると言えます。しかし家族でも、学校でも、または会社でも、どこでも対人関係のあるところにはいつでも悩みが付きまとい、そういう中で私たちは暗い思いになったり、落ち込んだりして心の平和を失うことになります。ダビデが「私はいつも、私の前に主を置いた」（詩篇16・8）と書きましたが、私たちは自分の前に人を置くのではなく、ダビデと同じように「私の前に主を置いた」と言うことができれば確かに一番良いのです。しかし現実は人のことで心がいっぱいです。ルカの福音書はイエス様が誕生されたときのことを、次のように告げて御心を示しています。



地の上に、平和が

『御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」』

（ルカ2・13、14）

この「地の上の平和」には、人と人との間の平和も大切です。悩みやトラブルやすれ違いの多い対人関係の中でもなお、主の御心の第一のものは人々の心が平和であるということです。

敵をも和らがせる

イエス様ご誕生のときに、天の軍勢が「地の上に、平和が・・」と神を賛美して言ったのはイエス様のこの悩みとへりくだりを予見してのことに相違ありません。主の十字架と復活あっての「地の上に、平和が・・」でありましょう。このイエス様を前に置いて私たちは広く対人関係の悩みなどは主のサインであることをへりくだって受け止めて、主が生きて働いておられることをもう一度思い出して元気をいただかなければなりません。

聖書には「主は、人の行ないを喜ぶとき、その人の敵をも、その人と和らがせる」（箴言16・7）

ですから、ここで私たちはどうしてもイエス様のサインを見落とすわけにはいきません。やはり対人関係の悩みなどは私たちがへりくだって考えるべき主のサインなのです。それを知って、自分の都合を離れて、悩みながらも信頼して主を見上げるようになれば、問題は軽くなり、心は静かな平安と喜びに満たされ、後日振り返ってみるときには、それは確かに主のサインであったことを見出すのです。

彼らをお赦しください

救い主であるイエス様は、この世で一方的に激しく憎まれて、そういう意味では最悪の対人関係を経験されました。イエス様には憎まれる理由がなく、良いことだけをしたのに十字架につけられました。しかしイエス様は十字架の上で、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と言われたとルカの福音書に記されています。イエス様はご自分を十字架につけた人々に対してこのようなみことばを残されたのです。弟子たちの汚れた足を洗われてから、「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」（ヨハネ13・14）と言われたあのみことばを読むときと同じように、私たちの心の中を明らかにされてしまうみことばです。

とありますが、このみことばは主の御心そのものです。そしてここで「人の行ない」と書いてあるのは、関係する人々の祝福を熱心に祈る、ということでしょう。この「行ない」は神様の前にも人の前にも正しいものですから、祈る本人はどうしても平安に満たされることになります。

ですから、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。」（マタイ5・44、45）とか「自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。」（マタイ5・46）というみことばを読むと、やはり悩み多い対人関係の中にこそ「わたしはここにいる」という主のサインがあり、そしてそのような問題は決していたずらに起こっているのではなく、渦中の人々に対する主のご配慮なのだという確信を与えられます。

報いは喜びと平安

パウロは「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません」（ローマ12・14）と書きました。また「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい」（ローマ12・17、18）と書いてあ

人にはできないことも、神にはできるのです。

待望と忍耐

小島勝巳

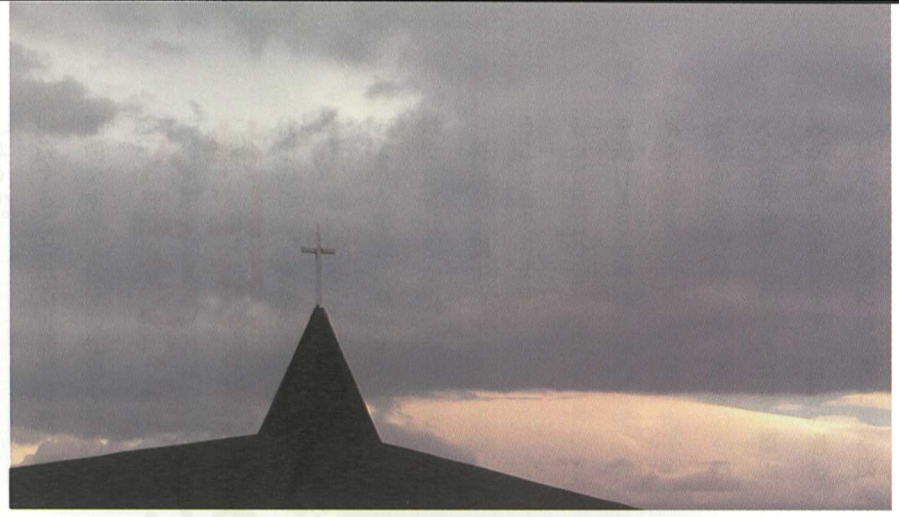
わります。否、そのようなことがあればこそ、その対象である人のための祝福を熱心に祈る機会が与えられた、と考えるべきです。むしろ、祈るために主はちょっとしたすれ違いなどを、主にある兄弟姉妹の間に起こして、その人のために祈れとサインを送っておられる、とさえ思われます。

すれ違いとか誤解とか不満の内容は、主の十字架を思えば、もとよりたいしたものではなく、それどころか時間とともにどうでもよくなってゆくものばかりです。キリスト集会というエクレシア（主の集会）を形作っているのは目に見えるものではなく、目に見えない隠れた忠実な祈りですから、私たちの性質を良くご存じのイエスきずられないで、自分の敵のために祝福を祈るべきです。

エクレシア

キリスト集会の人たちのように、主に救われた者どうしの間には、たとい何の問題がなくとも互いの祝福を祈り合うという恵みがあります。家でも、会社でも、どこでも心に思い浮かぶ限りの信徒のために祝福を祈ることは、大勢集まる場で直接挨拶を交わすのと同等に、あるいはそれ以上に大切なことではないでしょうか。

ちょっとしたすれ違いとか誤解とか不満とか、そのような大小の問題があればなおさら、見えないところでの祈りの大切さは増し加



様はこのようなサインを山ほど送って、私たちの心に敢えて風波を立てて祈りに導かれるのではないでしょうか。

ここで、事はそんなに簡単ではない、と言って顔を固くするか、主のみこころのとおり祈ってみましょう、と言ってへりくだるか、そこは大きな分かれ道です。経験豊富だった漁師のペテロはまだどこの誰だか分らない人のことばに従って、「でもおことばどおり、網をおろしてみましょう。」（ルカ5・5）と言いました。主は私たちの知識や経験を超えたお方です。「でもおことばどおり」と答えたことがペテロの人生を変えたのです。

やはり主は生きておられます。イエス様の復活のとき、「彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっていた」（ルカ24・41）と、聖書は弟子たちの喜びを表現していますが、私たちもこの嬉しさを胸に秘めてイエス様のサインに答えながら歩んでまいりましょう。



松見敬三
セコム（株）勤務。１９４８年岩手県生まれ。盛岡第一高校、上智大学外国語学部卒。

私たちの人生には、苦しみや悩みが数多くあります。自分の過ちや欠点が招くものもあれば、原因が分からず、防ぎようのないものもあります。また、これらの不幸を避けようと懸命に努力して、かえって泥沼の深みにはまってしまうこともあります。

将来を予測することは、人間にはできませんから、これから先そのような事態に直面することはないと、言い切ることはできません。仕事のこと、家族のこと、健康のこと、親族や友人のことなど、いやでも取り組まなければならないことは、沢山あります。これらの問題をすべて自分の知恵や努力で解決することは不可能ではないでしょうか。

でも、幸いなことに、私たちイエス様を信じる者には、それを乗り越える道が用意されています。自分の能力の及ばない事柄を、主なる神に委ね、疑うことのない素直な信仰によって解決していただく、という道です。

聖書は、神に不可能なことは一つもない、「人にはできないことも、神にはできる」と繰り返し語っています。神は天地を創造され大きく係わってくださり、今も生きて働いておられます。

「わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。」（イザヤ45・7）

イエス様がこの地上に来てくださった事実もそうです。

そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。――神にとって不可能な事は一つもありません。」

（ルカ1・34、35、37）

信じるか、信じないかは、あなたの意思によるのです。

次の詩は、今多くの書店に並べられている、茨木のり子著「倚りかからず」という詩集の中からの

一編です。

もはや、できあいの思想には
倚（よ）りかかりたくない。
もはや、できあいの宗教には
倚りかかりたくない。
もはや、できあいの学問には
倚りかかりたくない。
もはや、いかなる権威にも
倚りかかりたくない。
ながく生きて、心底学んだのは
それぐらい。
じぶんの耳目、
じぶんの二本足のみで立っていて、
なに不都合のことやある。
倚りかかるとすれば、
それは、椅子の背もたれだけ。

茨木さんは、二〇〇六年に八十歳で亡くなられた大阪生まれの詩人です。少女時代に、ドイツに留学したことのある父親から、日本人は依頼心、依存心が強いところが問題だ、と常々聞かされていたようです。そのような影響の中で育ち、強い自立心とナイーブな感性を持ったこの方が四十年後に書いたのが、上記の詩です。凛として立派ではありますが、私は読んでいて何かお気の毒になります。「寄りかかるものが椅子の背もたれだけ」とは、なんと寂しく、頼りない言葉でしょうか。この最後の一行は、自嘲気味の軽いユーモアとしても、悲しすぎます。もし生きている間にイエス様に出会っていれば、きっと、「倚りかかるのは、真の神、イエス・キリストだけ。」と書き記したのではないでしょうか。

さて、聖書には、次のような記述があります。

そこで、人々はイエスのところにその子を連れて来た。その子がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。

イエスはその子の父親に尋ねられた。「この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。」父親は言った。「幼い時からです。この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」

するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」 するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」（マルコ9・20〜24）

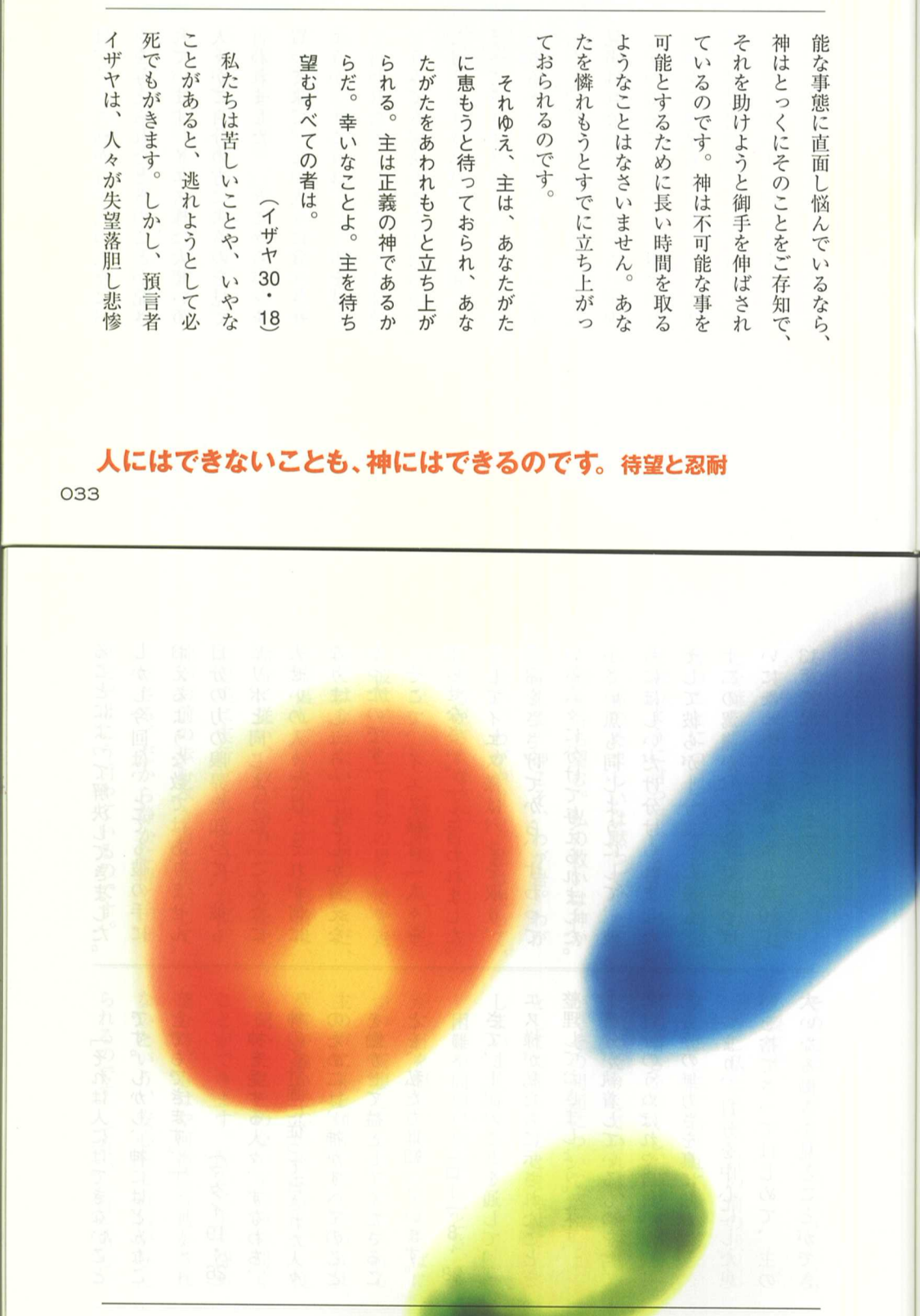
この父親は、すこし前まで、イエス様の弟子たちに息子の悪霊を追い出してくださいと頼みました。しかし弟子たちにはそれができなかったので、今度はイエス様にお願いしました。しかしそのお願いの仕方を、イエス様は咎められました。父親は「ただ、もし、おできになるものなら」と半信半疑でイエス様に頼もうとしたからです。咎めにあってはじめてこの父親ははっとし、息子を何とか治してやりたい一心で、見栄も外聞もなく、ありのままの自分をさらけ出し、「信じます。不信仰な私をお助けください。」と心から叫びました。そのとき、父親とイエス様の間に、真の出会いが起こったのです。そして父親がすべてを委ねてイエス様を信じきったとき、イエス様はその子を癒されたのです。

このように窮地に立たされ、自分にできることは何一つない、というとき、神はあなたに「努力しなさい。頑張りなさい。自分で解決するまで、悩み続けなさい」とは言われません。神はただ「私を信じなさい。そうすれば、すべてわたしがやる。」と言っておられるのです。あなたが今、解決不可能な事態に直面し悩んでいるなら、神はとっくにそのことをご存知で、それを助けようと御手を伸ばされているのです。神は不可能な事を可能とするために長い時間を取るようなことはなさいません。あなたを憐れもうとすでに立ち上がっておられるのです。

それゆえ、主は、あなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。

（イザヤ30・18）

私たちは苦しいことや、いやなことがあると、逃れようとして必死でもがきます。しかし、預言者イザヤは、人々が失望落胆し悲惨



な生活にあえいでいるとき、「主はあなたをあわれもうと待っておられるのだ」と、人々を神である主にまっすぐ向かわせたのです。その言葉は、思いつきや知識で言えるものではありません。主を仰いでいる者だけが言える言葉です。もしあなたがいま抱えている問題が、自分の力では解決できないと見極めたら、勇気を出してきっぱりとその問題から手を引き、自分の能力で解決しようとすることを放棄し、それをすべて神に引き受けていただきなさい。これが問題解決の秘訣です。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（1ペテロ5・7〜10）

ヨハネの福音書6章5節以降には、イエス様が五千人の人々にパンを与えられたときのことが記されています。イエス様は大ぜいの人々がご自分の方に来るのを見て言われました。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」これは、ピリポを試して言われたのでした。イエス様は、どうみても解決不能な状況の中で、ピリポがイエス様だけに信頼し、すべてをイエス様に委ねることができるかどうかを見られたのです。しかし、ピリポの答は残念ながら見当外れでした。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」イエス様がピリポに期待されたのは、「私にはどうすべきか分かりません。私には不可能ですが、あなたには不可能なことはありません。私はあなたがなさることを信頼し、待ち望んでいます。どうかあなたのみわざを見せてください。」と言うことでした。物事を冷静に考える賢いピリポでしたが、その時は目の前の問題に心を奪われて、「神に不可能はない」ことを思い出せなかったのです。

もう一人の弟子のアンデレは、イエス様に言いました。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。」彼は、食べ物がないと知った途端に人々の間を歩き回り、ほんの少しの食べ物を集めて報告したのです。アンデレは、まず走り回って食べ物を集めることを考えました。彼はこれまでも、多くの問題を行動す

ることによって解決してきました。しかし今回は、とても彼の手におえるような数ではありません。自分の力の限界を知って、彼もピリポと同じように「こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」としか言えなかったのです。

そこで、イエス様は「人々を座らせなさい。」と言われました。そしてイエス様はパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けて与えられました。小さい魚も同じようにして、彼らにほしいだけ分けられました。そして彼らが十分食べた後も、十二の駕籠がパンくずでいっぱいになった、とヨハネ6章10～13節に記されています。

「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

（マタイ19・26）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ8・28）

さて、上記のことを通して、イエス様が私たちに示されたことを整理しておきましょう。まず、

①自分が執着しているものを捨て、

②自分のうぬぼれや自負心を捨て、

③自分の無力さを真に知ること。

つまり、自分を中心にした思いを捨てさってはじめて、主の大いなる働きを見ることができ

ということです。

そして、その結果はどうなるのでしょうか。

主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。

（イザヤ40・31）

「待ち望む」という言葉には「強くなるために身をよじったり、または伸ばす」という意味が含まれています。頑丈なロープは、麻の繊維をよじり、伸ばし、束ねて、あの強さに縒（よ）りあげられます。私たちも、本来は弱いものですが、「待ち望む」ことによって、神の性質によって強められ、よじったり、伸ばしたりして、どのような試練にも耐えられるように鍛え上げられます。つまり、「新しく力を得」るのです。また、上記の聖句には「鷲のように」とありますが、鷲のように風に身をまかせて空を飛べたら、どんなに自由で素晴らしいことでしょう。人生の様々な圧迫やしがらみから解放されて、高く遠い彼方を目指して飛んでいけたら、今までの悩みや苦しみなどいっぺんに忘れてしまうのではないでしょうか。また「走ってもたゆまず、歩いても疲れない」のですから、この世のどんな荒波に会っても、安心して前に進んでいくことができるのです。

私たちの信仰生活は、もちろんすべてが思い通りに進むというわけではありません。試練も、問題も、苦悩も多いのです。それらに出会うとき、主はそれを通して私たちを練り鍛え、ご自身の性質を植え込み、私たちを神の子どもとしてよりふさわしい者にしようとなさるのです。その鍵となるのが「待望と忍耐」です。

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。

（ピリピ1・29）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道

るのです。

主が問題を解決してくださることを確信し、すべてを主を委ねて待つことについて、ダビデは詩篇で次のように言っています。

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。

（詩篇62・1、2）

彼は、決して自分の思いで先走ってはならない、待ち望むべきだ、と確信していたのです。「お前は、命令に従い、教えられたことをただ忠実に実行せよ。そうすれば、神がお前の歩むべき道を指示してくださる。だから静かに待て。」ダビデはこう言っているのです。

そのためには、忍耐がどうしても必要です。

もし私たちが、目の前の状況の良し悪しに左右されてふらつき、落ち着きをなくし、神でない何かに頼ったりしていれば、神がせっかくその問題について解決しようとしておられることを無駄にしてしまいます。

困難や問題に出会ったとき、静かに目を閉じ、聖書のみことばについて瞑想し、心の内におられる主の声に耳を傾け、神と交われば、聖霊が働いて心の奥に今まで一度も聞いたことのない主の声を聞くことができます。静かに主を待ち望む時、もはや何物にも動かされないという、安心感と自信が与えられるのです。それが「待ち望む」

も備えてくださいます。

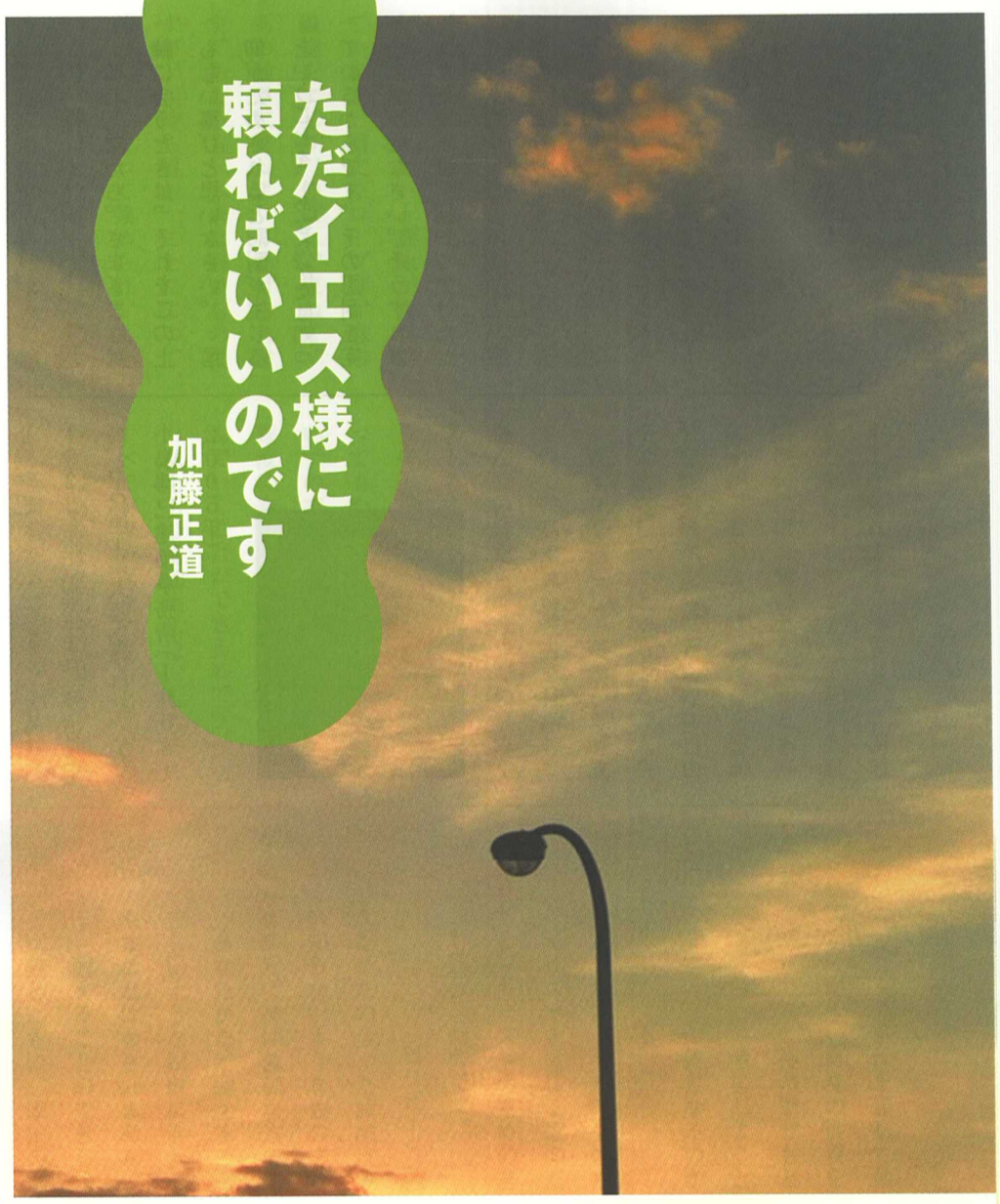
（1コリント10・13）

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

（ヤコブ1・2～4）



小島勝巳
1932年東京都生まれ。多治見中、高、名古屋工業大建築学科卒。（有）小島勝巳建築事務所（1968～2005年）。



ただイエス様に頼ればいいのです

加藤正道

人間に対しても、悔い改めてイエス様を受け入れるとき、神は間違いなく救いの手を伸ばしてくださいます。聖書の約束、「どんなことでも神にはできるのです」。自分の思いでなく、神を人生の主として受け入れようとするとき、人間にはできないことも神は確実になしとげてくださる。人間を救ってくださる。これが聖書の約束です。私たちはただ主に、そのままの自分をお任せしたらいいのです。

　このような実例は、キリスト集会の中にいくつも見ることができます。その例を二つばかりお話しましょう。八年前、忘れられない葬儀がありました。その方は孤独な方で、よく妹さんに「淋しい」と言っておられました。しかし、葬儀で拝見したお顔は安心しきった平安なお顔でした。妹さんは、「こんな兄の顔は見たことがない」と言っておられました。葬儀の時に飾られていたのは、まるで子供のような写真でした。そのまま、素直にイエス様に頼られていた、そんな写真でした。

　もう一人の方は、精神的な悩みを持ち、多くの薬を飲んでおられました。しばしば、自宅で一人で眠ることができず、幾つかのビジネスホテルに泊まったりするほどでした。しかし、四年前に葬儀で拝見したお顔は、苦しみなど見出すことはできない、平安そのものでした。生前、お母様宛てのお手紙を見せてもらいましたが、そこには聖書の言葉が書かれてありました。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。（詩篇23・4）」その方は、苦しみの中からイエス様に叫ばれたのではないかと思います。そして、このような魂をイエス様は必ずご自身の救いへと導いてくださるのです。「どんなことでも神はできるのです。」

　聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」――「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」（ローマ10・11、13）のです。主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。自分の思いを捨て、すべてありのままに、ただお任せすると、一方的に恵みをいただけ

弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」

　イエスは、彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」

（マルコ10・26、27）

　イエス様がこのように言われたのは、ある裕福な人が救いを目前にしながら、自分からそれを捨てて立ち去った後のことです（マルコ10・17～22参照）。彼は真剣に永遠のいのちを求め、救いを求めていました。彼はイエス様に聞きました。「永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいのでしょうか。」イエス様は「殺してはならない。姦淫してはならない。」など、最も基本的なモーセの十戒のいくつかをあげて答えられました。すると彼は言いました。「先生、私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」その人の高ぶりを見抜かれたイエス様は、試しにその律法の一つを実際の行動で示すように求められました。「あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。」これを聞いて彼は悲しみながらイエス様の前から立ち去りました。この裕福な人は、口先とはうらはらに、自分の思いを優先し、隣人のためにその富を手放すことができなかったのです。

　これを見てイエス様は弟子たちに言われました。「裕福な者が神の国にはいることは、なんとむずかしいことでしょう。」続いて有名なたとえを語られます。「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」そしてその後に続くのが、冒頭に引用した、救いの真理を弟子たちに明かされた聖句です。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」

　ここに出てきた裕福な人のように、私たち人間の主人公は、いつも私、私、私です。そこから離れることは何と困難なことでしょうか。私、私、私という思いが、どれだけ人間の救いの邪魔になっているでしょうか。しかし、そのようなのです。私はどうなのか、私はどうしなければならないかといった、自分に関する思いを捨てて、ありのままの自分を神の前に差し出せば、必ず主の救いを知ることができるようになります。

　人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもいないからです。

（ガラテヤ2・16）

　私たちの行ないと主がくださる救いとは、何の関係もありません。ただ主にお任せするところに、救いの門があるのです。私たちに負うところは何もないのです。救いは、ただ、恵みなのです。ルカの福音書に出てくる、イエス様と一緒に十字架に架けられた犯罪人の一人がとった態度こそ、救いにいたる唯一の道です。犯罪人の一人は言いました。

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

（ルカ23・42、43）

　当時の極刑である十字架の刑を受けたのですから、犯罪人は重い罪を数多く犯したはずです。しかし、人がそれまでどういう人生を歩んできたかは救いとは関係ないのです。彼は最後に「イエス様、私のことを思い出してください」と、すべてをイエス様に明け渡す態度をとりました。そして、これこそが救われるために十分な態度であり、そこに主の愛が働くことを聖書は示しています。私たちの行為によらず、ただイエス様が、その愛ゆえに一方的に救ってくださるのです。

　神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに

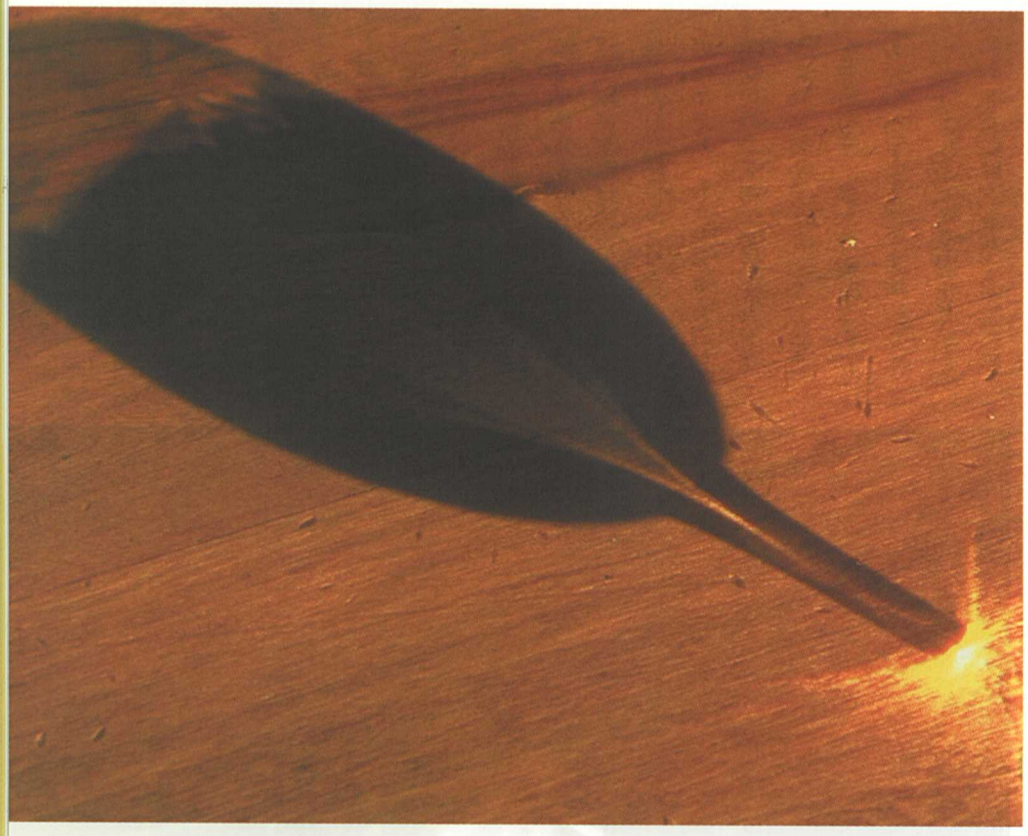
示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。（1ヨハネ4・9、10）

神様は私たち一人一人を一方的に愛していてくださいます。どんなに神様に対して無関心であっても、神様は私たちを愛していてくださっているのです。そして救いを提供していてくださるのです。

「神の愛が私たちに示されたのです。」とあります。私たちが体験的に「神の愛」を知ることこそ、神のみこころです。そして、私たちの救いの代価が、神のひとり子イエス様の十字架上の死です。その犠牲によって主である神は、全人類の罪を赦してくださいました。旧約聖書には、神様がイスラエルの民に「ささげもの」について語られた所があります。「ささげもの」という言葉は、原語でコルバンと言い「近づく、近づかせる」という意味なのだそうです。神様はご自身に近づく道、ご自身の愛を知る道を備えてくださっているのです。神様にただ頼ると、その事実を体験的に知るようになります。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。（ヘブル10・19～23）

救われるために、私たちに必要なのは、イエス様を信じること、今までの生き方を悔い改めること、つまりイエス様に「頼りきること」だけです。何か特別な行ないや捧げ物は必要ないのです。イエス様



の十字架の死を通してのみ私たちは救われ、新しいいのちの道に踏み出すことができるのです。ただ、ただ、「頼って」いればいいのです。

「わたし（主）の義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」

私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。（ヘブル10・38、39）

私たちは、日々、ただイエス様に頼っていけばいいのです。いつもすべてをお任せすればいいのです。そして、後ろを振り向かず、いつも新たに頼ることこそが大切です。イエス様を信じるゆえに、私たちは主のみこころに添う者とされ、信仰によって歩むことが「与え」られるのです。神様の一方的な恵み、神様とのつながりが与えられるのです。

イエス様とは、どのようなお方でしょうか。イエス様の直接のみことばをいくつか見てみましょう。

「わたし（イエス様）は門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」（ヨハネ10・9～11）

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしはあなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ14・27）

「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」（ヨハネ16・33）

イエス様が、ご自身の平安を私たちに与えて護ってくださると約束しておられます。しかし、私たちは日々の生活の中で、しばしば押しつぶされてしまいそうになります。逃げ出したくなります。なぜ、このようなことを経験しなければならないのでしょうか。信仰の先輩であるパウロも、同じような経験をしました。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。（2コリント4・8～10）

これらの試練は、イエス様がくださったいのちを、より深く豊かに知るためなのです。パウロは、イエス様の福音を広めるためにともに闘い、多くの試練の中を通ったピリピの町のクリスチャンに、次のように書きました。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。――何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ4・4、6、7）

信仰の歩みは、私たち自身と全く関係がないのだと思います。一から十まで主イエス様が成してくださる歩みです。あれやこれや思



案することをやめて、ただ、「お願いします」という、主に頼り切る心の態度だけが大切だと思います。ですから、自分自身に絶望することは大きな恵みなのです。人は自分に絶望してこそ、神から来る希望、恵み、確かな光を実際に見ることができるのです。

真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。（使徒16・25）

牢に投げ込まれてどこにも希望を見出せなくなったとき、パウロとシラスは神様に祈り、賛美しました。そして、神様がくださる平安を知ることができました。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。（2コリント4・6、7）

これは、イエス様に救われたクリスチャンに宛てたパウロの手紙です。私たちは救われていても、私たちだけではもろく、価値のないものにすぎません。しかし、私たちはなかなかそれに気がつかないのです。心のどこかで、私もまだまだ捨てたものではない、と思っていはしないでしょうか。ですから主は、私たちが一度ペチャンコになることを通して、そのことに気づかせ、祝福してくださるのです。まったくお手上げになることを通して、豊かに恵んでくださるのです。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（2コリント4・17、18）

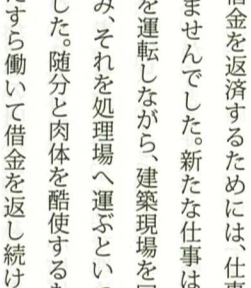
神のくださる人生に無駄なものは一つもない、起こってくることはすべて益としてくださるのです。この人生で確かなもの、真の価値あるもの、変わらないものが何かを知るためです。主イエス様の前に身を低くするとき、必ず良かったと言えるようにしてくださるためです。私たちはこの世において、もっと涙を流していいのだと思います。多くの詩篇を書いたダビデは神様の前によく涙を流しました。私たちもイエス様の前に、涙を流していいのです。

キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、神によってメルキゼデクの位に等しい大祭司となえらたのです。（ヘブル5・7〜10）

主イエス様は、私たちの心の叫びも涙もよくご存知です。私たちが心のすべてをただ御前に明け渡し、すべてをお任せするとき、驚くべき主の恵みを注いでくださるのです。

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。（詩篇62・5〜8）

加藤正道
一九六二年鹿児島県生まれ。
錦江湾高校、関西外国語大学英米語学科、万国バプテスト神学校卒。
南九州コカコーラボトリング（株）勤務



ただイエス様に頼ればいいのです

主のことばに生かされて

岡本 恵以



恵以さん（右）
父・雅文さん（左）

一九七八年、私は五人兄弟の長男として生まれました。クリスチャンの両親のもとで、幼い頃から神様の存在を信じ、小学六年生の時、洗礼を受ける恵みを与えられました。しかし、本当にイエス様と出会い、悔い改めが与えられたのは、私が二五歳になった時です。

中学生活を送る中で次第にイエス様から心が離れ始めた私は、高校生になってからは、まるで坂道を転がるように、イエス様とは無縁なすさんだ日々を送るようになりました。いつも都心の繁華街に出てはふらつき、夜中まで遊びほおけ、その日をいかに楽しむか、それだけを考えて生活していました。将来のことは深く考えず、ただ欲に身を任せた毎日を送っていました。

その頃、両親、特に父とは心が全く通わなくなっており、何を言われても反発心しか芽生えませんでした。聖書に基づく生活はさまざまなことを束縛され、制限される生き方だと思っていた私にとって、イエス様を第一とする両親の存在は、目の上のたんこぶのようでした。そして高校を卒業した年、父に従うことを拒み続けた私は家を出ました。父とは縁を切られた状態でした。仕事も決まっていなかったため、一人暮らしを始めた当初は、食べるのもままなりませんでした。それでも縛られることのない生活は魅力でした。

仕事を始めても態度が悪いということで、何度もクビになりましたが、何とか定着した仕事を見つけ、生活できるようになりました。やがて、少し余裕の出てきた私は、再びこの世の生活に溺れるようになりました。そして、気がつくと返済できないほどの借金を抱えていたのです。借金を返済するためには、仕事を変えざるを得ませんでした。新たな仕事は、慣れないダンプを運転しながら、建築現場を回って廃棄物を積み、それを処理場へ運ぶといった内容のものでした。随分と肉体を酷使するものでしたが、ひたすら働いて借金を返し続けました。今までの生活から一変し、ほこりと汗にまみれながら働く毎日でした。その後、何とか借金を返済して、大学に通うことにしました。このままでは将来が不安だと思い始めていたのです。すでに家を出てから六年ほど経っていました。仕事と大学で忙しい毎日でしたが充実感がありました。しかし、イエス様のことを思うことは皆無でした。

そんな生活を送っていた時、突然、兄弟の中で一番思い出の深かった二十歳の妹「さら」が天に召されたのです。あまりに急な出来事でした。唯一連絡先を伝えていた母から妹が危篤との連絡を受け、駆けつけた病院の一室で、心臓マッサージをされている妹が目に飛び込んできました。その目の前に広がる光景は実に耐え難いものでした。その場で静かに息を引き取った妹を見ながら、私はぼう然とし、心が張り裂けそうでした。悲しみと怒りがとめどなくあふれ出し、「なぜだ」「どうして」という思いで苦しくて仕方がありませんでした。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。（詩篇121・1、2）

私と「さら」は、長男、長女として小さな時から多くの時間を共に過ごしてきました。その妹がいなくなってからは、ただただ虚しい日々の連続でした。心の内にはいつも言葉にできない叫びがありました。そして、心にぽっかりと空いてしまった穴を遊ぶことで埋めようとしました。しかし、どうしても以前と同じように楽しむことができませんでした。騒げば騒ぐほど、そのお返しに虚しさが襲ってくるのです。そうして、いつしか悲しみを胸の奥に秘めるようになっていました。それは、自分のこの悲しみは、友人とは分かち合えないのだと気づかされたからです。自分の心の内をわかるものなどいない、たとえどんなに親しい人間でも自分の心の奥を知ることなど不可能だと気づいたとき、この上ない孤独を感じました。

依然としてこの世に浸りながら生活を続けていましたが、死の問題、天国の存在が頭から離れませんでした。妹の死に意味がないとは思いたくなかったのです。しかし、どのような意味があるのか答えは見出せずにいました。

その頃から不変的なもの、信頼に足るもの、心の拠り所を求め始めたように思います。誰に誘われるともなく日曜の集会に十年ぶりに足を運んだのもその頃でした。聖書のみことばを聞いていると不思議と心が落ち着きました。それから、この世の価値観で生きている自分の現状に次第に疑問を持つようになりました。

そんなある日、散々遊んだ帰りに、「パッション」というイエス様の映画が公開されているのを思い出し、観ることにしました。映画が進む中、民衆がこぞって何の罪も犯していないイエス様を「十字架につけろ」と叫ぶ場面が出てきました。小さい頃から何度も聞いたり、読んだりして知っている場面のはずなのに、何故かその時ガツンと衝撃が走りました。その民衆の姿が、イエス様を知りながら無視し続け、妹が召された時は恨みさえしていた自分自身の姿と重なったのです。「自分は、きっとその民衆の一人として共に叫び、イエス様を十字架につけたに違いない。」と突然そう感じました。そう思うと申し訳なさに涙があふれました。次のみことばを思い、初めて心が痛みました。

彼（イエス様）はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

（イザヤ 53・3、4）

この時から、罪というものをはっきりと意識するようになりました。このままではいけないという思いと、この世への未練との狭間でイエス様に従う決心がつかずにいた私にとって大きなきっかけでした。その時からイエス様と共に歩みたいと思うようになりました。

それから、聖書のことばを通して、誰とも分かち合えないと思っていた自分の心の内を全てご存じの方がおられることを知るようになり、孤独を抱えていた心に慰めが与えられました。

あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました。

（詩篇 31・7）

そして、私を希望のない生活から救うためにイエス様は喜んで十字架に向かってくださったことも知るようになりました。

集会での交流を通して、次のみことばが与えられたとき、胸に込み上げてくるほど深い感動を覚えました。それは、予想すらできなかった妹の死から、イエス様に出会うまでの歩みを思い、本当にこのみことばの通りに生かされたのだと思わされたからです。

「わたしがあなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなたに、『生きよ。』と言い、血に染まっているあなたに、くり返して、『生きよ。』と言った。」

（エゼキエル 16・6）

いくら考えてもわからなかった妹の死は、理解し尽くすことはできませんが、今では私とイエス様を結ぶ架け橋となっています。■

岡本 恵以（おかもと・えい）
1978年東京都生まれ。
町田第一中学校、成瀬高校、産能短期大学卒。
2006年より弁護士法人むらかみ勤務。

苦しみに会ったことは、しあわせでした

根本 都



苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇 119・71）

今私は、家族と共にこのみことばの真実に感謝する毎日を送っています。結婚以来、毎年元旦には近くの神社に立ち寄ってから茨城県の主人の実家に向かうのが恒例でした。熱心に手を合わせている主人の後ろで、ここには神様はいない、手を合わせても無駄という思いがいつもあり、どうしても拝めませんでした。主人からは「どうして一緒に手を合わせないのか。夫婦で同じものを拝まないから、家はだめなんだ」と、いつも言われていました。でも、本当の神様はどなたなのか、どこにおられるのか、と求める心は全くありませんでした。

そんな愚かな私を、唯一の真の神様であられるイエス様は、娘、由美子の苦しみを通して、ご自分の許に導いてくださいました。

由美子は結婚して四年後に与えられた子です。その三年前に授かった長男とは違い、幼いころから非常な恥かしがりやで、私の心配のタネでした。私はあの手この手を使って直そうとしましたが、それは今思えば、神様が造り与えてくださった娘を自分のものと勘違いして、思い通りに育てようとした誤り、罪でした。

小さい頃からピアノが大好きだった娘は、県立高校の音楽科に入学しました。入学式の日、前の席に見覚えのある方が座っていました。以前、お隣の家に遊びに来ていた女の子のお母さんで、藤井さんという名前をその時初めて知りました。藤井さんとは共に高校の父母会役員をして、よく一緒に行動するようになりました。が、彼女には、何でも相談できる雰囲気がありました。その頃私は、入学以来あれこれ悩んでいた娘への対応に苦慮していましたので、役員会の帰りの電車の中で「何か問題が起きた時、あなたはどうやって解決するの？」と尋ねました。藤井さんは「私は神様に祈るの」と答えて、吉田さんというお宅で家庭集会があることを話してくださいました。私は「行ってみたい」と思い、連れていっていただくことになりました。

吉田さんの家にはたくさんの人が集まっていて、みんなニコニコしていました。なぜかホッとしました。ベックさんがイエス様のお話をしてくださり、一緒にお祈りをしました。あたたかい気持で家に帰りました。

やがて娘も一緒に集うようになりました。でも、娘に関する悩みごとは続いていました。長い間、主人の忠告を無視して子育てをしてきた私は、このことでも自分で何とかしようとしたのですが、どうにもなりませんでした。そのころの私は、集会に集ってはいても、救われていなかったと思います。

それまで忍耐してきた主人も、私を裁くようになりました。「自分の言ってきたことを、お前は何一つ聞き入れなかったじゃないか」と非難する主人。「由美子のために一生懸命やってき

ただけ。こうなったからって、なぜ私のせいにするの」と反論する私。毎日くり返していたこのパターン、責任のなすりあいは、みこころを知らない愚かな行為でした。みことばは正反対のことを言っています。

「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

（ヨハネ 9・2、3）

主人は、娘や私がキリスト集会のキャンプや礼拝に行くことには反対しませんでした。でも、「どこへ行ってもかまわない。けれども自分を巻き込まないでほしい」と、イエス様を拒んでいました。娘は大学一年の後期試験が終わった時、「もう疲れた。休みたい。また元気になったら出るから」と、一歩も動けなくなりました。休学させ、なんとか入院させましたが、三ヶ月後に勝手に退院してしまい、ますます状態が悪くなりました。

ある日、主人は「残念だ。一回も自分が言ったことを聞き入れなかった」と、同じ言葉を再び口にしました。その時、ふと「そうかもしれない。私が間違っていたかもしれない」と思わされて、反論できませんでした。黙ってうつむいていた私に、主人は「イエス様だな」と言ったので、びっくりしました。初めて主人がイエス様を意識した瞬間でした。

この頃、集会の大勢の方々が、主人の救いを祈ってくださっていました。その祈りをイエス様は聞き入れてくださったのだ、と思います。ある人から「ぜひご主人にも、御代田の国際福音センターに来てほしい」と言われ、そのことを伝えると、なんと「行く」という返事が返ってきたのです。喜びのあまり涙が出そうになりました。

こうして親子三人で御代田へ出向きました。福音センターに着いた時、玄関ホールにベックさんがおられ、それを見た娘は駆け寄って「ベックさ〜ん。お父さんが来ました」と告げました。

それからも大変なことは次々と起こりましたが、主人がイエス様と共に立ってくれて、家庭の秩序は少しずつ守られるようになりました。娘との信頼関係も徐々に回復していきました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。（エペソ 5・22）

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。

（エペソ 6・1）

この頃、これらのことを通して、私の妹が救われました。娘も大きく変わりました。集会の方々は温かく支え、祈ってくださり、本人も必死で祈りました。娘の心はどんどん開かれ、不安からすっかり解放されて、今は喜んでいます。長い間蓋が閉じられたままだったピアノも、今は娘が毎晩、主人と私の賛美の伴奏のため弾いています。一番楽しみなひとときです。

恐れないで、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。

（ルカ 8・50）



左から まりさんの弟・野谷 悠さん、次男・守さん、妻・まりさん、長男・光さん、郁彦さん

イエス様は今、私の生活の中心になっています。

石黒 郁彦

「イエス・キリストこそ唯一の救い主」と信じたのは、一九九五年、三十一歳の冬でした。今も机の上に立ててある聖書の言葉は、妻のまりに出会った時に彼女からもらったものです。こう書いてあります。

彼に信頼する者は失望させられることがない。（ローマ 10・11）

私は一九六三年に生まれました。父、母、兄と私の四人家族でした。父は私が三十歳の時に亡くなりました。葬儀は仏式でした。私はまだイエス様のことを知りませんでしたが、イエス様はまちがいなく、この時すでに私のための計画

根本　都（ねもと・みやこ）
1947年新潟県生まれ
高田小、雑司が谷中、巣鴨女子高卒
夫、稔さん、長男、寛さん、長女、由美子さん

以前、ふと「私が間違っていたかもしれない」と思った時のことが頭に浮かび、「かもしれない」なんてとんでもない、すべての罪は私にあった、とはっきりわかりました。「イエス様はこんな私のために十字架上で苦しまれ、死んでくださった。ごめんなさい。ありがとうございます」と、今は心から言うことができます。そして、イエス様が三日目によみがえられ、今も私たちのために生きて働いてくださっている事実を、また天国へのお約束を心から感謝しています。家の中が真っ暗闇であった時、「もうこんな家に居られない」と言っていた主人が、今は「夫婦は一つになることだ。それが一番大切。それはイエス様にしかできない」と、いつも言っています。今でも、イエス様から目が離れると、すぐに人をつまずかせるような者ですが、家族が主と共に支えてくれています。試練の中で現実にとらわれ、恐れおののいていた時、イエス様はみことばをもって、直接語りかけてくださいました。

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄雄しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。（ヨシュア 1・9）

愛そのものであられる主イエス様に、心から賛美と感謝をお捧げします。



左から都さん、夫・稔さん、長女・由美子さん

を進めておられました。

父の死は悲しくありませんでした。人が死んだらそれで終わり、というふうには、思えなかったのです。むしろ「死は終わりではない」という確信がありました。そのときは、なぜ自分の中にこんな確信があるのかわかりませんでした。

私は、葬儀に携わった二人のお坊さんに、別々に尋ねました。「人は死ぬとどうなるのですか。」すると一人のお坊さんは「それは、わからないのです。そこに行って見てきた人は、誰もいないのです。」と答えました。もう一人のお坊さんは、難しい仏教の話をしてくれたのですが、チンプンカンプンでよく理解できませんでした。

父の死の半年前、仕事仲間が集まった夕食の席に、後に結婚するまりがいました。友人の奥さんの親友だったのです。前述の聖書の言葉は、この時もらったものです。そして、このすぐ後に、まりが語った「証し」の録音テープを、友人から貸してもらって聞きききました。

まりからもらった聖書の言葉が、私の内に働いてくれたのだと思います。父の死を通して体験した思いへの、答えをいただいたような気がしました。しかし、当時の私は、この言葉の中の「彼」を、ぼんやりと受け入れただけでした。当然のことながら、苦しい時には「彼」は全く無力のように思え、信頼することができませんでした。一方で、信頼できない自分に対して、「それでいいのか?」「不信仰な者だ。」「そんなことだと苦い思いをすることになる。」と、もう一人の自分が責め立てます。こういう毎日は、非常に疲れます。集会に行っても喜びがなく、喜んでいる周りの人を見ても苦しいばかりで、無理やり集っていたのを覚えています。それでも、どうにか十二年にわたって集会の中にいることができました。不思議なことです。陰で多くの祈りが支えてくれたのだと思います。

結婚を通して信じたという方は、意外に多いのではないでしょうか。中には、しっかりした信仰に立たれた上で結婚に導かれた、という方もいらっしゃるでしょう。しかし私は、はっきりと与えられたものを、ぼんやりとしか受け取っていませんでした。ですから、苦しい時、信じられない。不安の中嘆く。疑り深く、やがて疲れる。というところに、いつもはまっていました。集会でも、皆さんの前では表面的に喜んだふりをして接することが多くありました。そんな十二年間、経済的な困難がなかなか解消されないことに、疲れ果てていました。目に見えるものに脅かされ、信仰にも喜びが得られない。喜びのない信仰という矛盾は、乗り越えることのできない大きな壁でした。周りの信仰を持つ人たちを見ては、「自分もあそこへ行きたい。」と思いつつ、「自分だけはあそこに行ってはいけないのだろう。」と斜に構えていました。夜の帰り道、「イエス様、どうしてこうなの、なぜですか!」と愚痴をこぼすこともよくありました。イエス様は共に隣りを歩まれながら、じっと聞いていてくださったと思います。

まりも、そんな私のことを、随分と祈っていたと思います。

イエス様はある日、それが最適の「主の時」であったのだと今は確信するのですが、キリスト集会のある方を通して、明らかな解放を宣言してくださったのです。「もう、いいんだ。大丈夫だよ。」と。これまでもよく耳にした言葉でしたが、その時には「そうか。大丈夫なんだ。」と確信して受け取ることができました。そして、心の中にくすぶっていたものが消え去り、空っぽになりました。私は、本当に軽やかな気持になりました。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。（詩篇 138・8）

主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。（詩篇 103・14）

悩む者には毎日が不吉の日であるが、心に楽しみのある人には毎日が宴会である。（箴言 15・15）

私は、自分自身が変わることを求めていた

石黒 郁彦（いしぐろ・ふみひこ）
1963年、横浜生まれ川越育ち
株式会社リクルート、細井デザインルームを経て、
現在、自営でグラフィックデザイナー
妻、まりさん、長男、光さん、次男、守さん

すべての事に感謝して前に進みたい

石黒まり



左から 夫・郁彦さん、室田夫妻、まりさん、大堀さん、前列 次男・守さん

のですが、その方は「無理はしなくていいんです。」と言いました。そのとき、栄光を自分自身に帰そうと必死だったことに気づかされました。天から降りてくるものを待つのでなく、自分が上ろうとしていたのです。

以前の私は、「いろいろな選択肢があって、例えばあの時こうしていたら、今より良い状況をイエス様は与えておられただろう。」と考えたりしていました。たいてい自分を責めて終わるのですが、疲れる信仰の原因は、こんなところにもあったのだと思います。しかし、遠回りとも思えるその道筋も、必要な道であったと今は思っています。その道を通らなければ、今の自分はありえないからです。過去を見渡すと、道は一本で、選択肢はない。あの時あの状況であのような思いのある自分には、あの選択しかできなかった。イエス様はそんなこと当然ご存知なのです。ひとつひとつが全てそうでした。

ぼんやりした信仰から十二年、私の心は軽くなり、喜びました。それは自分が変わったのではなく、変えることのできない自分の中に、イエス・キリストに住んでいただいたからです。イエス様だけが、相変わらずだめな私を義としてくださるのです。自分を責め立てる声からふと立ち返り、「あっ良かったんだ!」と思えるのです。喜びの元が自分自身にあるという勘違いを、ついしてしまいます。そのため、喜べないとがっくりするのですが、集会の方々との語らいの中で、「イエス・キリストが内におられる。私は変わらずとも良いのだ。」と教えられます。何回教えられても気がつくと忘れていますが、それでも何回も教えていただけるのです。「イエス様」と「集会の皆さんとの交流」は今、私の生活の中心になっています。本当にありがとう、愛するまり、愛する皆さん、そしてイエス様。天の御国での再会はもうすぐですね。待ち遠しい。 ■

「あなたはすべての事に感謝できますか?」これは、まだ何も信じていなかった頃、初めて私に問いかけられた、主なる神からの言葉でした。当時結婚したばかりの親友の家にかざられていた聖書の言葉は、こんなふうに書かれていました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。（1テサロニケ 5・16〜18）

たまになら喜べるかもしれません。でも、いつもは無理。絶えず祈るなんて、私はクリスチャンじゃないし、できない。そして、「すべての事について、感謝しなさい。」という言葉。これは絶対に受け入れられない言葉でした。私は幼い頃より家庭の中で、人間の暗い部分、人の

心の奥底にもっているどんよりとした暗いものを見せられて生きてきました。私の心はボロボロでした。

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。（ヨハネ 1・5）

神様なんているわけがない。神様だったらこんなひどいことするわけがない。問題なさそうに見えるまわりの人を見ながら、不公平だと感じていました。また同時に、私自身、外側は明るくふるまっていましたから、何も問題がなさそうに見える友達も本当は悩みをかかえているのかもしれない、とチラッと考えたりもしました。

二十歳の頃、家を出ましたが、その後どうやっても過去から逃れられませんでした。私は真実を見ないよう、考えないように、一生懸命やってきました。過去を忘れたかのように。ですから、「すべての事に感謝しなさい。」と突然つきつけられたとき、立ちすくんでしまいました。あのつらく苦しかった時を「感謝しなさい。」なんて、そんなことできるわけがない。でも、もしクリスチャンになったらそうできるのだとしたら、なんて幸せなことだろうか、と思いました。でも、私には全く関係のないものとして、普通の生活を送っていました。

普通の生活とは、外側はやさしそうに明るくふるまって、心の中は人をねたんだりうらやんだり、いつも自分の事しか考えない生活です。いつも上を求め、いつも何かほしいと思い、気になるのは人が自分をどう思っているかという生活です。それ以外の生き方があるなどという事実を知りませんでした。自分の人生の本当の目的、人は何のために生きるのかなんて、考えもしませんでした。未来にはいつも漠然とした不安をかかえながら。

親友からは時折、キリスト集会への誘いもありましたが、いつも断っていました。食事を共にする時、彼女はいつも祈るのです。黙って下を向いて。私はとってもそれが嫌でした。これさえなければいい人なのに。私のために心をこめて祈っていたと知るのは、救われた後のことです。あれもこれも、友は私の救いのために、心

を尽くして祈り、行動していたのだと。私は何も彼女のために心からしてこなっかたのに。それは、イエス様からの愛だったのです。中学で彼女と同じクラスにされたのも、イエス様のおはからいだったのです。

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三撚りの糸は簡単には切れない。（伝道者の書 4・12）

友と私の間に、イエス様がいらっしゃるのです。

話は前後しますが、友人に不満を感じつつも、聖書を知りたいと思うようになりました。当時私は、モデルの仕事をしていました。暗闇の家から逃れ、一人で生活していくにあたって、ありがたい仕事でした。それと同時に、主は私に最も良いことを教えてくださいました。仕事を通して、私は自分がいかに人をねたみやすい者だったかということを知るようになりました。自分の心に嫌気がさして、疲れきっていきました。こんなにひどい自分を受け入れてくれる人はいないものかと。そこでゆっくり休みたいと。――それは、イエス様だったのです。

集会に誘われても断っていた私が、自分から「行ってみたい。」と友に頼んだのです。家庭集会にも行きました。そこでは蘇畑さんという方が聖書の話をしていました。私にはよくわかりませんでした。終わってから蘇畑さんの隣で、ただ涙していました。とても静かな、そしてあたたかいものが満ちていました。

そんなふうにして一年が過ぎた頃、宣教師のベックさんと個人的にお話していただく機会がありました。内容は覚えていないのですが、ありのまま、醜い心のままで神様に受け入れられていることを知り、涙でぐしゃぐしゃになりました。過去は変えられませんが、すーっと心が楽になってしまったのです。苦しみはあるのに、それが心を支配しなくなったと言えば良いのでしょうか。うまく言い表わせませんが、とにかくうれしくなってしまいました。大切なのは、過去どうだったかではなく、今からどうするかなのです。この時から、イエス様と共に生きるという、新しい、本当の目的を持った人生

様な毎日平な祈たいれ私題をがではそはと

としないように。それでも私が二足のわらじをはいて子供たちにつめよってしまう時、いつもそのわらじをぬがしてくれるのは、夫です。夫は私と出会ってから救われ、結婚に導かれた人です。聖書に「後の者が先になり…」とありますが、その通りです。わりとすんなり？イエス様を信じた夫は、結婚してから、仕事や子供の問題を通して、自分の信仰に苦しんでいました。私は彼を助けようといろいろ試みましたが、それは彼を助けるどころか、かえって追いつめていたのです。最後にたどりついたことは、夫のためにただただ祈るということでした。必死に祈り続けました。聖書を読んで祈ると、不思議なことに、状況が全く変わらなくても、すっと平安になるのです。けれども、夫婦で心を合わせて祈ることができませんでした。そんなある日、子供の問題をきっかけに、夫が息子たちと毎朝祈るようになりました。夫婦の祈りもきっと、夫に何か別の試練が起こされて祈るようになるのだと思っていました。ところが、イエス様は全く違うことをされました。私が母との葛藤で苦しむ姿を見て、夫が「今日から祈ろう。」と言い出したのです。私はもう「ああ、ぜひお願いします。私のために一緒に祈ってください。」という気持ちでした。夫のために夫婦の祈りを、と思っていたのですが、実は私のために、イエス様は用意されたのでした。

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三撚りの糸は簡単には切れない。（伝道者の書 4・12）

夫と私の間に、イエス様がいらっしゃるのです。夫婦の祈りは今日も続いており、私にとってどうしても必要な宝物になっています。

そして二〇〇七年の夏頃から、夫にも、同じ信仰を持つ友との深い交流が与えられました。このような交流を通して、イエス様に愛されていること、イエス様が自分の罪のために十字架にかかってくださったことを新しく喜ぶ者へと、夫を変えてくださいました。人の集まる所が苦手だった夫が、自らすすんで集会へ行くようになりました。生き生きとした喜びを求め

がスタートしました。

イエス様を信じた私を見て、母は、「本当に親孝行だ。」と言いました。クリスチャンではない母ですが、私が心から明るく陰りがなくなったのを感じ、「娘への心配がなくなった」と信仰を持ったことを喜んでくれました。

私も二児の母親になりましたが、子供たちもイエス様を信じてイエス様に仕える者となってほしい、と心から願っています。子供たちは難産の末に与えられました。特に第一子は、緊急帝王切開となり、数分おそかったら母子ともに命がなかったそうです。二ヶ月早い出産でした。保育器の中でたくさんのチューブでつながれた我が子を初めてみた時、私の力の全く及ばない、イエス様の御手によってのみ生かされていることを知りました。「私は何もできません。主よ、この子はあなた様のものです。あなた様にささげます。」と祈りました。それから十年がたちます。子育てを通して、いつもこの原点に立ち返らされる毎日です。

この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。この子は一生涯、主に渡されたものです。（1サムエル 1・27、28）

子供が小学校一年生の時、クラスで学級崩壊が起こりました。原因の一人に我が子の名前があがった時、私がまずしたことは反論でした。子供も自分も悪くないという思いでした。聖書の心を持ちながら、行いは全く反対のことをする、それが私の姿でした。

あなたは家に大小異なる枡を持っていてはならない。（申命記 25・14）

異なる二種類のおもり、異なる二種類の枡、そのどちらも主に忌みきらわれる。（箴言 20・10）

毎朝、聖書以外のもので子供を導かないよう祈らされます。自分にとって常識的な考えを神

石黒　まり（（いしぐろ・まり）
1968年、ドイツ／シュトゥットガルト生まれ。
夫、郁彦さん、長男、光さん、次男、守さん。

て。それは、結婚十一年目を迎えた夫婦の、さらなる深いきずなにつながっています。私にとっても、信じられないような恵みでした。

試練はいつもあります。過去に家族で経験したことの記憶がトラウマのように襲ってきて、そのことで夫の心を傷つけてしまうこともあります。それでも私は、すべての事に感謝して、前に進みたいのです。

すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ 5・18）

私にはできませんが、イエス様と共にならできるのです。私の内側に働いてくださるイエス様が、導いてくださるのです。

もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。

（詩篇 119・92）

今言えることは、子供みたいですが、「イエス様ごめんなさい。イエス様ありがとう。イエス様大好き！」それしかないです。

先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。

（イザヤ書 43・18、19）

妻の死で私は砕かれました



左から 長男・優一さん、一郎さん、長女・香織さん

春木一郎

わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。

（イザヤ 48・17）

私に主イエス様が働きかけてくださったのは、二〇〇六年十月九日未明でした。妻の美智子は前日の朝、天に召されました。死期が迫り、最後の時が来るのはわかっていましたが、その瞬間から涙がとめどもなく流れ、胸は張り裂けそうでした。美智子を失った悲しみだけではなく、それまでの妻への仕打ちを後悔する思いにとらわれて、もう生きていくことはできない、美智子の後を追い謝りたい、という気持でいっぱいでした。

その夜、私は妻の隣に座り、妻が遺していった「みことばの小冊子」を読んでいたのですが、泣き続ける私を縛り付けていた思いが、いつの間にか消えていることに気づきました。主がそばにおられたのです。

あなたが何をしても、神はあなたとともにおられる。

（創世記 21・22）

私は小さいころ、教会に付属するサレジオ幼稚園に通いました。なぜ、そこだったのか、わかりません。最初の教会との出会いでした。でも今は、両親のためにも用意された主の導きであった、と信じることができます。

私の父は家庭を持ちながら自分一人の人生を送る人でした。会社などの組織に属さない生き方をしていました。そんな父親の背中を見て育った私は、自分の中にも父と同じものがあるのを知っていました。小学生のころから父と同じ人生を歩むと思っていました。人に溶け込めない、いつも一人でいたい自分を、父と重ね合わせていました。そして、何の目的も生き甲斐も喜びも見出せないまま、高校を卒業して父の店を手伝うことになりました。そこは夜の仕事をする人々が来る店でした。私は惰性で店に出ていました。

そこを離れたのは、父が起こした事件のためです。逮捕拘留された父は、面会に訪れた私に、事件のことを一言も語りませんでした。父の保釈金のため、実家と店は人手に渡り、私も仕事を失いました。

私は警察との対応や、実家と店の売却の際の叔父叔母の仕打ちに疲れ果て、引っ越したアパートに引きこもりました。一家の生活は母が支え、妹は高校一年でした。保釈された父は、たまにしか寄り付きませんでしたが、ある日、母が離婚したいと言い出すと、怒り出して母と私を傷つけようとしました。制止してくれる人がいなかったら、母も私も生きていなかったかもしれません。その日以来、父は姿を消しました。私は生まれて来なければよかった、生きる価値などない人間だ、と思わされました。自分は愛されない者であり、呪われる者である、という思いが片時も離れることのない日々を過ごすようになりました。

一年後、やっと働く気になった私は、求人雑誌で、高校時代に級友と立ち寄ったことがある京王線明大前駅前のパン屋の広告に目が留まり、そのパン屋で働くことにしました。そこにクリスチャンの従業員がいて、誘われて新宿の教会に行きました。教会では多くの人と話しましたがなじめず、聖書の話も心に響きませんでした。

二年後、美智子が入社してきて、付き合うようになりました。そして、美智子の希望で、新宿の教会に行きましたが、彼女もなじめなかったようです。美智子も心に傷を持ち、求めるものがあったのだと思います。私は美智子に、私の過去をすべて打ち明け、君のことは僕が守ると約束して、結婚しました。二人の生活は楽しいものでした。長男も生まれ、私には与えられなかったものを満たすため、家庭を愛しました。

その後、大宮の病院から父危篤の知らせがあり、私は行く気はなかったのですが、美智子に勧められて足を運びました。十数年ぶりに会った父は、もう意識がありませんでした。父は死んだら献体することを主治医に告げていました。そんなことにさえ、私を拒否する嫌がらせのように思えました。美智子は「お父さんも自分の人生を悔い、犯した罪を償いたいと思っていたのですよ」と言ってくれましたが、そうは思えませんでした。父への憎しみと、わけのわからない怒りが、心の中でくすぶり続けました。

長女が生まれ、いつも四人で一緒にいたい、と思う日々を過ごす一方で、自分の望みが叶わない時には家族から離れることを考えてしまったり、自分のしたくないことをしてしまうような者でした。美智子はキリスト集会に集うようになりましたが、私には関係のないことでした。

一九九六年十二月、美智子は乳がんの手術を受けました。七年間再発しなければ大丈夫と言われましたが、切除したリンパ節にがん細胞があり、検診の度に不安でした。術後、健康が保たれている間は平静でしたが、長くは続きませんでした。二〇〇二年夏に乳がんが再発、二度目の手術、そして骨転移、月の半分は抗がん剤治療で入院――。美智子が私から離れて行く、私の前から消えてしまう、という思いにつぶされて、病院に行くことも苦痛になりました。支え励まし、慰めなければならない立場であるのに、何もできない私でした。それどころか、美智子の気持を苦しめ傷つけることさえしてしまいました。

美智子はそんな私を愛してくれました。再発の苦しみからも立ち直り、いったんは元気になりました。主が導いてくださった、と後で知りました。

美智子は痛みと苦しみの中で、支えとなった聖書のみことばを小冊子にまとめました。妻は副作用の苦痛に耐えられず、十分な治療は受けられませんでしたが、再発後四年の時間が与えられ、その間を、イエス様を紹介するために生きることができました。一方、私は完全にイエ

春木　一郎（はるき・いちろう）
1957年東京都生まれ。第四日野小、日野中、国学院久我山高卒。
（株）アメミヤ・ヴァンベールを経て、現在（株）サンメリー勤務。
妻、美智子さん（2006年10月8日召天）、
長男、優一さん、長女、香織さん

ス様に背を向けていました。お見舞いに来られたキリスト集会の方々との接触は、最悪のものとなりました。

最後の一週間、美智子は痛みもなく、安らかに天に召されていきました。そして、召された美智子の顔を見た瞬間、私は砕け散りました。

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ 9・16）

三十年の間、父への憎しみに生き、すべてを父のせいにし、家族を愛していると言いながら愛されることしか頭になかった、みにくい自分に気づきました。私自身が罪にまみれていることを気づかされました。そのような私に、主は救いの手を差し伸べてくださり、私の罪も赦されるのだと知らせてくださったのです。父への憎しみは消えていました。泣くことも笑うこともできなかった私が、今は泣き、笑っています。

わたしの恵みは、あなたに十分である。

（2コリント 12・9）

昨年夏、主は私が気づいていなかった罪を教えてくださいました。父に謝っていなかったことです。また、父は死の間際に、美智子が言ったとおり罪を悔いる気持を抱いたのではなかったか、とも思わされて、父のたましいのために祈りました。

主イエス様は私の罪のために十字架にかけられ、三日目によみがえって今も生きておられ、私のそばにいてくださる。苦しみ悲しむ日があっても、イエス様と共に歩むなら喜ぶことができる、と今は感謝の日々を送っています。いつの日か天国で美智子と父、そして母に再会し、主に導かれたこの一年余りのこと、これからいただく主の恵みの数々を話せることを楽しみにしています。美智子が祈っていた二つのこと——私がキリスト集会に集うことと、妻が紹介したかった集会の人に出会うことは、どちらもかないました。私を見守ってくださるイエス様が大好きになりました。

主はあなたの心の願いをかなえてくださる。

（詩篇 37・4）■



私たちは、主の光のうちに光を見る。

古田康子

愛する者たち。あなたがたを試みるために
あなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように
驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

（1ペテロ 4・12、13）

このみことばのとおり、私は主から思いがけない試練をいただきました。その時は驚きましたが、主は試練を通してすばらしい栄光を見せてくださり、私は「喜びおどる者」に変えられました。そのことを、皆様方のお祈りに感謝しながら証しさせていただきます。

二〇〇七年十月十四日の夕方、ひどい腹痛に襲われ、武蔵野日赤病院に緊急入院しました。

腸閉塞かと思いましたが、翌日午後七時から五時間かけて手術の結果、「S字結腸がん」と分かり、がんとともに大腸を三〇㌢ほど切除し、人工肛門をとりつけました。リンパに転移はなく、ただ腹水播種という問題が少し残りました。

手術に入る前に激痛でうなっている私に、担当医から手術の方法について説明がありました。「患部を切って肛門につなげるか、人工肛門にするか」の選択でした。本人の承認を取るためのようでした。私は正直、どちらにすべきか分かりませんでした。一瞬、聖書の「権威に従う」という言葉が頭に浮かびました。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。

（ローマ 13・1）

私はすぐに「神によって立てられた権威」に従おうと心に決め、担当医に「すべてお任せいたします」と答えました。そして「がんですか？」と尋ねますと、うなずかれました。長年のうなことを言って攻撃してきます。でも主は、すぐに私の思い煩いの罪に気づかせてくださいました。ハッとしました。

神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

（ヤコブ 4・7）

サタンよ下れ、と祈り、すでにサタンに勝利しておられる主から平安をいただくことができました。主は愛する子どもである私たちに、最善を備えてくださっておられると確信することができました。そしてその通りに、主は栄光を現わしてくださいました。

二組の息子たち夫婦、特に姉妹がたが気を配って、主人をそれぞれの家に呼んでくれたり、家族ぐるみで我が家に食材持参で夕食に来てくれたりして、主人を護ってくれました。

主人は私と二人だけのときよりも嬉しそうで、ほんとうに感謝でした。

さて、いよいよ私の手術となりました。皆が手術室への廊下越しにガラスの向こうで手を振ってくれました。私は思い煩いから開放されて、晴れ晴れと手を振って手術室に運ばれていきました。

やがて手術の結果、S字結腸に出来たがん腫瘍を取り除き、人工肛門が作られたことを知らされました。私の身体の中の腸の一部がおへその横にピョンと顔を出しているのです。初めて見た時はショックでした。主人の母も同じ病でした。ですから、これから始まるいろいろな場面が頭をよぎりました。そして、同じ病の痛みを体験することによって、主人の母親の苦しみを深く知ることができるようになったのです。

私が救われた頃、罪との苦しい戦いの一つが、主人の母に対する愛の欠如でした。姑の召された病気がS字結腸がんでした。それと同じ病気を、主は今度はこの私に下さったのです。言葉では言い表わせない気持ちでした。

私は二十八年前に、自分の罪を悔い改め、イエス様の十字架によって赦され、生きる喜びをいただきました。でも、主の前に悔い改めるこ経験から手術前に分かっておられたのだと思います。

そのような状態の中で、私は主人のことが気になっていました。主人は六年前に脳梗塞で倒れ、半身不随となり、その後大腸からの大量出血を二度もしている身です。ですから、主人を残して入院することは絶対避けたいと思っていたのに、こんなことになってしまったのです。

私の手術のための手術室がなかなか空かず、長い間待たされました。その時が、私とサタンとの闘いの時でした。サタンはささやくのです。「彼の食事はどうする？風呂はどうする？転倒しないだろうか？」などと、次々に彼が日常生活の中で困ることをささやくのです。そして、「おまえは主を信じ、どんな苦しみの時も、『聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださる（コロサイ1・22）』ようにと祈ってきたではないか。それなのに、なぜ、おまえの神はこのようなことをおまえにするのか」と、私の心を地の底に突き落とすよ

とができても、姑にはほんとうに謝っていないのではないか、という思いがずっと残っていました。しかし後に、主は次のみこばをもって解放してくださいました。それは大きな解放でした。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちはどのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。（ローマ 8・26、27）

姑に対して悔い改めの祈りをとりなしてくださった主が、同じ病を私に下さり、何を知らせようとしていらっしゃるのか。主は私に一つの場面を見せてくださいました。

私のストーマ（人工肛門に装着する袋）交換は結構難しいのですが、それを学ぶ時に嫁である二人の姉妹は付き添って一緒に学んでくれました。私は、姑に対してはしていませんでした。なぜかそのような二人の姿を見て、私の姑に対する罪は完全に主の御手に受け取られ、十字架につけられ赦されていたのだと分からせてくださったのです。ほんとうに私は幸せ者です。

救われてからも主の前に罪を犯し続ける私ですが、ずっと祈り続けていることがありました。姉、私、弟、妹、妹の5人すべての救いです。信仰を持つ子、持たない子のことを憂いて、4年前に天に召された母はいつも「兄弟仲良くして」と言っていました。まず私が、次に妹二人が主を信じて救われました。その頃から姉は「住む世界が違う」といって、疎遠になっていきました。でも、私の息子たちの結婚式、主人の母の葬儀、納骨式には出席してくれました。

また、私は妹たちに対して高ぶる目、傲慢な思いによって深く傷つけ、つまずかせてしまいました。深い悲しみに襲われました。数年前に

妹たちとの間にさまざまな問題が与えられ、ただ肉の姉であるということだけでその信仰をさばき主を悲しませてしまいました。

主の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。高ぶる目、偽りの舌、罪のない者の血を流す手、邪悪な計画を細工する心、悪へ走るに速い足、まやかしを吹聴する偽りの証人、兄弟の間に争いをひき起こす者。（箴言 6・16〜19）

主はこのみことばをもって私の罪に気づかせてくださり、私を深い悔い改めへと導いてくださいました。

あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。（ローマ 14・4）

たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。

母の望んだ五人の兄弟姉妹の一致のためにも、またまだ救われていない家族のためにも、三人の姉妹が祈り続けていかなければならないと切に願っております。そして、主の救いは主ご自身がしてくださることであり、人間にできるものではないことも分かり、自分の至らなさ、罪を悔い改め、愚かな自分の手から放すことができました。

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ 6・18）

がんという病になったことで、私の兄弟姉妹が病院に来てくれるようになり、いろいろと深いところまで涙ながらに話をしました。それによって暗いトンネルと思われたその先に、主は信仰の輝く光を見せてくださったのです。もちろん完結したわけではありません。まず主にある三人が、しっかりとした信仰の岩に立つという希望の光をいただいたのです。大きな喜びで、主に感謝しました。また、日頃から救われることを祈っていた方々も思いがけず病院に来てくださり、満ち足りた主にある交わりができたことも嬉しいことでした。がんにならなければ経験できないことでした。私はほんとうに幸せ者です。

神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいます。いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。（詩篇 36・7、9）

神の家族の中に置かれている平安と喜び、神の愛、兄弟姉妹の愛、家族の愛に感謝でいっぱいです。ハレルヤ！ ■



左から 生前の夫・清一さん、義母・喜代子さん、母・井上俊子さん、真砂子さん
後列 義父・菊男さん、

私の助けは、天地を造られた主から来る

大口真砂子
古田　康子（ふるた・みちこ）
1939年東京生まれ。北糀谷小、大森六中、八潮高卒
三井銀行勤務を経て結婚
夫、稔さん。長男、雅一さんと次男、知士さんは独立

主人、清一が天に召されて半年余りになります。葬儀は平成十九年九月三日、吉祥寺集会でさせていただきました。この日は私たちの二十九回目の結婚記念日でもあります。とても涼しく、良い天候に恵まれて感謝でした。

主人は今、天の御国の住人となり、すべての悩み、苦しみから解放されて、満面の笑顔で憩っているでしょう。そして、いつの日か天国で再会でき、今度はいつまでも一緒にいられる、と思えることは大きな喜びです。ですから、今は主人のことは心配することなく、前を向いて生きていくことができます。

私たちの結婚生活は、多少の問題を抱えながらも、三人の子が与えられて、にぎやかで楽しいものでした。試練が訪れたのは、主人が三十六歳の時。腰の椎間板ヘルニアで手術を受



左から 夫・稔さん、康子さん、
次男の妻・美知さん、次男・知士さん、
前列 孫・陶子さん、長男・雅一さん、
長男の妻・蘭子さん、孫・時人さん

大口　真砂子（おおぐち・まさこ）
1956年東京生まれ　町田市立小山小、堺中、忠生高卒
主人の父、菊男さん、母、喜代子さん、
長男、達也さん、長女、智香さん、次女、早紀さん。

あなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。（イザヤ 43・2）

一つ目のみことばは、病気の一番ひどかった時、涙にくれていた私に希望を与えてくださいました。この病の苦しみから助け出してくださる何か大きなもの、見えないものがあるはずだ、と漠然に思いめぐらせている時に与えられたみことばです。このみことばを通して、それは神様だ、神様が助けてくださるのだ、と信じることができたのです。

二つ目のみことばは、主人の闘病中に心の支えとなりました。この大きな苦しみも耐えられないものではない、神様、イエス様は必ず脱出の道も備えてくださるという確信が与えられました。日々弱っていく主人を見て、私は「あなたはもう、これ以上頑張らくていいのよ。イエス様にお任せすれば助けてくださる、脱出の道を備えてくださるのだから」と話しました。そして二人で祈りました。主人もこのみことばによって勇気を与えられたのです。

主人は退院後も下痢に苦しみ、一日四回のインスリン注射をして、行動も制限されました。病気は進み、足がむくんで歩けなくなり、再入院しました。こうして結局五回の入退院を繰り返したのですが、がんの痛みはほとんどなく、下痢も収まって、血糖値を気にしながらも食べる楽しみを取り戻すことができました。

主人は口数の少ない控えめな人で、イエス様や祈りのことはほとんど口にしませんでした。しかし、発病から召されるまでつねに穏やかでいられたことなど、その素振りから、イエス様を信じ祈っていたことは間違いないと思います。召される少し前のことですが、自力では到底起き上がれない体で、無意識のまま両手を大きく広げ、目をこれ以上あけられないほど見開いて、何かを見回し、驚いているような格好を三回くり返しました。とても不思議な光景でした。そして眠るように息をひきとりました。

私は主人が召される前後から、不思議と涙が出なくなりました。主人が亡くなって不安でいっぱいになるはずなのに、恐れがなく平安な心があるのです。イエス様の平安が与えられたのだ、と確信しました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。（ヨハネ 14・27）

三つ目のみことばの「わたしはあなたとともにおり、…あなたは押し流されない」というお約束も、今の私に力を与えてくださっています。どんなときにもイエス様という「頼れる岩」がともにいてくださり、今後どんな激流を通ることになっても押し流されることはない、と確信できるからです。そのような思いで毎日を過ごせることは、とても感謝です。

日ごろ人を妬んだり、自己中心の思いで動いてしまったりする自分を見る時、本当に嫌になりますが、そんな私のすべての罪を贖ってくださったイエス様にただただ感謝し、ひれ伏すばかりです。罪ある自分を戒めながら心豊かに歩んでいけるよう祈っていきたい、と思います。これまでずっと私を支えてくれた両親、子どもたち、兄弟、親戚の方々にも感謝しています。今一番の願いは、家族が一人残らずイエス様の救いにあずかることです。次のみことばが、「希望の灯火」となっています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒 16・31）■


義弟・大口勇さん（右端）らと。ご主人の葬儀で

けたのが始まりでした。それからは年に何回かは腰痛で体が曲がり、仕事を休むようになりました。私は、主人に重い物を持たせないように、無理な格好をさせないようにと注意していました。定年退職して腰を動かせなくなったら可哀想だ、と将来のことも気がかりでした。その一方で、退職したら趣味を楽しむ生活をしたい、と計画も立てていました。けれども、そんな計画は見事につぶされてしまいました。思いもよらない、すい臓がんの告知でした。

主人はその二ヶ月ぐらい前から背中の異常な痛みを訴え、私は出勤前や帰宅後によく主人の背中を揉んでいました。その頃、主人は忙しい職場に移ったばかりで帰宅も遅かったため、私は背中の痛みが腰への負担から来ていると思い、がんだなどとは考えもしませんでした。

手術は多摩丘陵病院で受けました。たいへんな手術とは説明されていましたが、予定を三時間超えて十二時間もかかりました。心配でたまりませんでした。手術後、主人は意識朦朧の状態で「ごめんね。ごめんね。悪いね。悪いね。」と言っていました。私は「清ちゃんは悪くない、悪くないよ。」と涙が止まりませんでした。主人は四十日で退院できました。

入院中、母と私は毎日、病院に通いました。親族の方もよく来てくださいました。なかでも感謝だったのは姉のお見舞いでした。イエス様を信じ、吉祥寺キリスト集会に集っていた私の姉は、毎日「薬だよ」と言って聖書のみことばを書いて届けてくれたのです。また、この間ベックさんはじめ、集会の方々がずっと祈ってくださったことを、後で知りました。

しかし、何一つ頼れるものを持っていなかった私は、主人の発病でうつ病になり、食欲もなくなり、どうしようもない背中の痛みに悲鳴を上げていました。主人の退院前から不眠になり、母の布団に入ったり、子どもにまで助けを求めていました。そして、その苦しみの中で、「助けてくれるのは誰だろう」と思いめぐらし、「誰か私を助けて！」と願い始めました。本当に苦しかったのです。それまでに経験したことのない、ひどい苦しみでした。退院して横に寝ている弱った主人を見るのがとても心細く、辛かったのを覚えています。主人の苦しみを気遣うよりも自分のことを優先し、うつ状態はひどくなりました。大病の手術が済み、これから夫婦で戦っていこうという時に、私は家族に迷惑をかける存在となってしまいました。そして、とうとう姉の家に身を寄せることになりました。

姉の家にはイエス様がおられました。家の中ではキリスト集会の本や雑誌、聖書、みことば入りのカレンダーが目に入ってきます。私は以前から理由もなく姉の信仰を嫌っていました。その気持は姉の家へ行ってからも、しばらく変わりませんでした。しかし、そんな私を神様は見捨てずにいてくださいました。姉は相変わらず優しく、忍耐深く私に接し続けてくれました。そして、みことばや祈りに触れる日々を過ごす中で、自分では気づかなかったのですが、私の閉ざされていた心が、少しずつ開かれていったようです。姉に連れられて吉祥寺集会にも足を運ぶようになりました。そして、平成十八年十二月の「近江八幡よろこびの集い」に参加した頃には、イエス様を受け入れていました。

イエス様を信じるようになって、しみじみ思わされるのは、みことばの力です。姉から義理で受け取っていたみことばが、私にとってこんなに大きな力になるとは、夢にも思っていませんでした。これまで私を特に力づけてくださった三つのみことばを、紹介したいと思います。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。（詩篇 121・1、2）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント 10・13）

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは











VILLINGEN

よろこびの集い2007

キリスト集会では、イエスさまを中心とした様々な集いをもっています。

日曜日ごとの礼拝・福音集会はじめ、よろこびの集い、家庭集会、祈り会、音楽会などです。ほかに結婚式、葬儀、天国に召された方の祈念会も随時行っています。

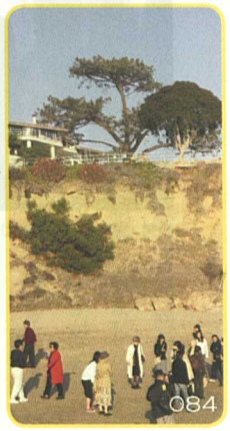
よろこびの集いは、公共の宿泊施設やホテル、国際福音センター（長野県御代田町）などを会場に、寝食を共にしながら礼拝と福音集会、親密な語り合いの時などをもちます。海外で開く場合は、観光や買い物も日程に組まれます。このため、イエスさまを知らない方々も気軽に参加できますし、よろこびの集いをきっかけに信仰に導かれた人が少なくありません。開催地は北海道から沖縄までの国内十数か所、海外数ヶ所で、2008年には35回の集いが予定されています。

写真は2007年後半のよろこびの集いのスケッチです。

- ドイツ フィリンゲン
  10月10~17日、18~25日、各100人参加
- 沖縄
  11月10、11日、140人参加
- 米国 ロサンゼルス
  11月22~27日、85人参加
- 近江八幡
  12月1、2日、400人参加

※「よろこびの集い」参加者の写真は、次頁からのメッセージに添えて、多数掲載致しました。





LOS ANGELES










OKINAWA







OHMIHATIMAN

聖書は何と言っていますか

―それでも福音を疑いますか

ゴットホルド・ベック

第2回

天地万物を創造されたお方、主なる神は、愛するひとり子であるイエス様をこの世に遣わしてくださいました。イエス様は、私たちの罪の身代わりとなって十字架上で死に、また三日目に復活することによって、すべての人のための完全な救いをなしとげてくださいました。ですから、悔い改めて、イエス様を救い主と信じるなら、だれでも救われ永遠のいのちを受けることができます。

主なる神の恵みによって救いを受けた人は、その時から神の子供となり、たましいに平安と喜びと自由を得ます。悔い改めて、イエス様を救い主と信じ、救いを経験したあとで後悔した人はありません。にもかかわらず、イエス様による救いの喜びの知らせすなわち「福音」を疑う人は少なくありません。なぜ、人は福音を疑うのでしょうか。また、疑うことは確かなことなのでしょうか。







聖書の言っていることは本当であるはずがないと考えている人には、深く考えずに疑っている人と、まじめに疑っている人があります。そして共に、自分が疑っていることを、多かれ少なかれ誇りに思っているように見受けられます。しかし、聖書を疑う人は、これこそはほんとうのものだと確信できるもの、どのような状況の中でもこれだけは確かだと言えるもの、そういったものを聖書以外のところから手に入れることができるのでしょうか。

どれほど哲学の勉強をしようとも、真理を求めて思索をこらそうとも、芸術や運動に没頭しようとも、またなにかの修行に励もうとも、この世でいかに大きな成功をおさめようとも、病気の時にも逆境にあっても変わらないといえるような喜びを手にすることはできません。まして、地上の生涯を終える日を希望のうちに迎えることはできない、ということはだれにも経験的にわかるのではないでしょうか。むしろ、自分の立場を守るために人の前に卑屈になったり、あるいは他人と比べて自分をいかにもすぐれたもののように思ったり、また逆に、困難な中でわらのようにむなしいものにも寄りすがってしまったり、あるいはまたこの世の力に負けて不法に進んだりしてしまうのではないでしょうか。支配者や権力者、あるいは実力者や成功者といわれた人たちでさえ犯罪行為に関わり、あるいは何かを恐れながら生涯を終えることは決して珍しいことではありません。そうしたことはすべて、天地万物の創造主なるお方を神としないで、造られたものを神とする人間には当然の結末なのです。聖書は次のように記しています。

彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。（ローマ 1・28）

彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。（ローマ 1・25）






1 疑うこととは

多くの人は、人から賞賛を受けたり、尊敬をもって見られたりすること、また逆に恥ずかしい思いをしないこと、仲間はずれにならないこと、そういったことが生きる上でもっとも大切であると考えています。いわゆる宗教家と呼ばれる人たちでさえ、立派な衣装で身を飾ったり、難しい修行をした人として特別の称号を受けることを当然のこととしているのは、そうした考えが人間に深くしみついていることを示しています。このように、他人の目に見える自分が大切だと考えている人は、他人が言っていること、書いていること、していること、そういったことに標準をあわせて生きてゆくことが大切だと思っています。しかし、そのような生き方の結末はむなしいものです。主なる神は、人間の本性を次のようにお語りになります。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。（ローマ 1・29〜31）

このすべてが自分にあてはまるわけではない、と考える人でも、すべてを否定することはできないでしょう。まして、神様がご覧になり、仰せになっているのは、行動に現れた姿ではなく、心の中にあるものだと知れば、なおさらのことではないでしょうか。私たちは人をごまかすことができても、主なる神の目をごまかすことはできません。生きる神の手に陥ることはほんとうに恐ろしい、としか言いえません。

福音を疑う人の中には、聖書をまじめに読んだことはなく、福音をまともに聞いたこともない人が少なくありません。彼らは、どこかに書いてあったことやどこかで聞いたこと、いわば不確かなものを参考にして、確かなもの（福音）を愚かなものだと決めてかかっているのではないでしょうか。しかも、意識する、しないは別にして、疑う自分を知者だと思っているのです。しかし、聖書は、疑う者は愚かだといいます。福音を信じて救いを受けない限り、人は初めから永遠の滅びに至るしかないものだからです。日本から出発して日本へ戻ってくる世界一周旅行を、自分の力だけで、すなわち歩いてする計画を立てた人がいるとします。この人が歩くことに固執し、船に乗ることを拒絶したら、世界一周旅行を成し遂げることができるでしょうか。失敗するに決まっています。船に乗る、乗らないは自由に決めることができます。同じように、福音を信じる、信じないも自由に選び取れます。しかし、その結果は自分で背負わなければなりません。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。（1コリント 1・18）

私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々のばあいに、おおいが掛かっているのです。そのばあい、この世の神（悪魔）が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。（2コリント 4・3、4）

滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。（2テサロニケ 2・10〜12）

主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。（2テサロニケ 1・7、8）








福音を信じることができないという人たちも、誰かを信じるということはあるのではないでしょうか。そして、ある人を信じるとは、その人の話したことを信じるということであるという事実は否定できないでしょう。そうであるなら、聖書のことばが真実で、そこには欺きも、欺こうとする意図もない、ということが分かれば、その人たちも福音を信じることができるのではないでしょうか。いいかえるなら、福音をまじめに疑っている人には、イエス様を信じる心の備えがある、といえるのです。

主なる神の意思は聖書だけに明らかにされています。まじめに疑っている人が誠実に聖書を読めば、主なる神はご自分のみこころを人間のうちに行ないたい、まことのいのちを与えたい、と望んでおられることが聖書のことばから分かります。

「だれでも神のみこころを行なおうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたし（イエス様）が自分から語っているのかがわかります。」（ヨハネ 7・17）

これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。（ヨハネ 20・31）

イスラエル人のナタナエル、十二弟子の一人トマス、さらに使徒パウロ、これら三人はまじめに疑っていました。しかし、彼らはイエスに出会い、イエスを信じるようになったのです。その経緯は次のようなものです。

まず、ナタナエルです。

彼（ピリポ）はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法（旧約聖書の一部）の中に書き、［旧約聖書の］預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」

イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「見よ。まことのイスラエル人がここにいる。この人には偽りがない。」ナタナエルはイエスに言った。「どこで私をご存じなのですか。」イエスは答えて言われた。「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見た。」ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」（ヨハネ 1・45〜49）



を見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない。」ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」（ヨハネ 1・45〜49）

ナタナエルはまじめに疑いました。しかし、心の中では救い主に会いたかったのに違いありません。だからこそ、イエス様に会ったらすぐに、「あなたは神の子です」と告白したのです。イエス様との会話からは、ナタナエルの喜びが伝わってくるような感じがします。

次は、トマスです。彼は人間としてのイエス様を信頼し、この方は救い主であると思ってはいたのですが、イエス様の復活をすぐには信じることはできませんでした。トマスは生涯をかけてイエス様にお仕えしたい、と思っていました。だからこそ、復活のような重要なことを、人から聞いて信じるような、いいかげんな信じ方はしたくなかったに違いありません。しかし、復活されたイエス様の、「信じないものにならないで、信じるものになりなさい」というみことばは、イエス様ご自身が復活を前もって知らせておられた事実を、トマスに思い起こさせたのだと思われます。トマスはイエス様を、「私の神、私の主。」と告白しました。主は、みことばを信じることの大切さをトマスにお語りになったのです。

十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、（復活された）イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられ






ていたが、イエスが来て、彼らの中に立って、「平安があなたがたにあるように。」と言われた。

それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは答えてイエスに言った。「私の主、私の神。」イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」（ヨハネ 20・24〜29）

最後は使徒パウロです。パウロはユダヤ人のエリートでした。しかもユダヤ教に熱心で、人間の姿のイエス様を救い主と信じることは神を冒瀆することだと考え、信者を迫害することに燃えていました。しかし、以下に書かれてあるようにしてイエス様に出会ったとき、彼の考えだけではなく、生き方も百八十度の転回を遂げたのです。その後のパウロの働きには目を見張るものがありました。それは後ろのものを振り返らずに、パウロにとって主となられた十字架のイエス様だけを見上げて一心に前に向かって進んだからでした。

以前は、私（パウロ）自身も、ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました。そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されるときには、それに賛成の票を投じました。また、すべての会堂で、しばしば彼らを罰しては、強いて御名をけがすことばを言わせようとし、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを追跡して行きました。

このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があって、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」

私が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言いますと、主がこう言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。」

こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。（使徒 26・9〜20）

ナタナエル、トマス、パウロの三人はまじめに疑っていましたから、イエス様に出会ったときに心の目が開かれ、機会をむだにすることがなかったのです。人は、心を開いて聖書に向かうなら、聖書に書かれていることは人間の頭では思いつくことができないものだ、人間が考えて書くことができるものではない、と気がつくでしょう。聖書のことばにふれて、お語りくださっているイエス様との出会いを経験するなら、だれでも信じることができるのではないでしょうか。深く考えずに疑うこととは異なり、まじめに疑うことは信じることの妨げにはなりません。

まじめに疑っている人々の中には、人間の頭では主なる神を知ることができない、と考えている人がいます。確かにそのとおりです。造られたものである人間が、自分の力や能力で造り主なる神を知ることができないのは当然のことでしょう。だからこそ、啓示によって書かれた聖書を通して、神はご自身を明らかにしてくださっているのです。

そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父（主なる神）よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」（マタイ 11・25、26）

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。（箴言 3・5）

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。（ヘブル 11・1）

私たちは教育を受けて、物事を懐疑の心で見ることの大切さを学んでいます。ですから、知的な疑いは、いかにも確かなもののように思えるかもしれません。しかし、聖書に関しては、事実は全く逆なのです。聖書に関して疑いを抱くのは、疑いを持つようにと悪魔が働きかけているからです。だから、疑う人は暗闇の中を手さぐりで歩くようなものです。疑いの根拠がどこにあるかを知ることこそが大切です。

私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々のばあいに、おおいが掛かっているのです。そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。（2コリント 4・3〜4）

なお、ここでいうこの世の神とは悪魔を、また不信者の思いとは知的な考え、を意味しています。








2 疑う理由には どのようなものがあるか

疑いの1「人格的な神の存在を信じられるか」

疑う理由の一つに、人格的な神の存在を信じない、というものがあります。このように主張する人も、時計や家がどのようにしてできたかを知らないはずはありません。時計や家が人間の手によって作られたものであるように、目に見える世界が、創造主によって造られたものであることはいうまでもありません。聖書は全巻の冒頭で次のように記しています。

初めに、神が天と地を創造した。
（創世記 1・1）

このみことばは、無神論、唯物論、進化論のすべてを打破しています。まず、無神論は神の存在を否定します。また、唯物論はすべてのものは物質からなりたっていると言います。さらに進化論は、世界は無機物、またほかのものから発展してきたと言います。しかし、聖書には、「初めに、神が天と地を創造した」とあります。初めに神による創造があったのです。だから物質も存在するのです。創造なくして物質が存在することはありえません。天地の存在こそは創造主の存在を明らかにしているのです。

神について知りうることは、彼ら（私たち）に明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。（ローマ 1・19〜20）

人間は、他の動物とは異なり、ある働きの結果としての何ものかを見ると、その働きをした人のことを考えることができます。ですから、大自然にふれると、人は創造主である神のことに思いをはせることができるのです。そのことに関するあかしを、旧約聖書の詩篇の中のからいくつか示しましょう。

私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたはご威光を天に置かれました。（詩篇 8・1）

あなた（主なる神）の指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ます。
（詩篇 8・3）

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。（詩篇 19・1、2）

主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。
（詩篇 33・6）

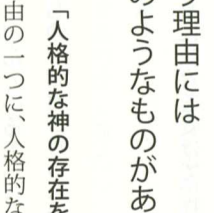
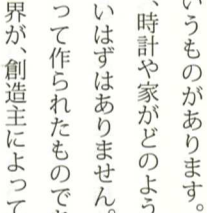
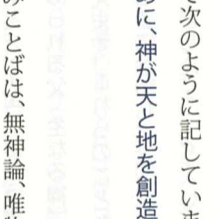
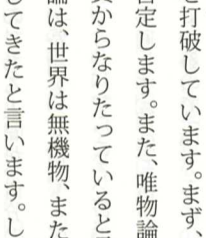
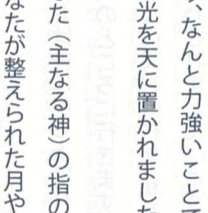
上にあげた詩篇のことばの結論として、次のみことばがあてはまるのではないでしょうか。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。（詩篇 14・1）

聖書は私たちの持つあらゆる疑問に解答を与えています。実際、聖書を読めば主なる神の存在を否定することは狂気の沙汰だとわかります。悪霊でさえも、「神はいない」などとは決して思っていないのです。また、主なる神は、人が不信仰のうちに蒔いたものを放置しておかれる方ではありません。悔い改めることをしないで、提供されている救いを拒むことは、主なる神ご自身を否定しているのであり、その結末は徹底的な滅びです。

あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。（ヤコブ 2・19）

おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。（黙示録 21・8）

疑いの2「キリストの神性は真実か」

疑う理由の第二は、キリストの神性を疑う、というものです。このように考える人は、人としてこの世を歩まれたイエス様を神であると信じることはできない、と言います。大切なことはあなたがどう考えるかではなく、聖書はどう言っているかです。では、聖書は何と言っているのでしょうか。

まず、主なる神がご自身をどのようにお語りなっているか、ということから見てみましょう。主なる神は、「わたしは、『わたしはある』という者である。」とご自身を明らかになさいました。すべてのものがなくなっても、なお「ある」もの、としてご自身を明らかにされたのです。ここには真理として、創造主として、さらには天地の支配者としてのご自身の姿が示されています。

モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか」。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。」
（出エジプト 3・13、14）

イエス様もまた、ご自身について次のようにお語りになりました。

イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」
（ヨハネ 8・58）

アブラハムという人は、イエス様がこの世に来られる二千年ほど前に生きていた人ですが、イエス様は「アブラハムが生まれる前から、わたしはいる」と仰せになりました。また、「わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である」とも仰せになっています。イエス様がこの地上におられた時間は三〇年ほどでしかありませんが、それは私たちを救うためにあえて人間としての姿をとってくださっていた限られた時間のことであり、ご自身は永遠なる昔から永遠なる未来まで存在しておられるお方であることを明らかにしておられます。

それで私（ヨハネ）は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。」
（黙示録 1・17・18）

聖書のみことばは、主イエス様が天と地の造り主であることを、明らかにしています。

すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。（ヨハネ 1・3）

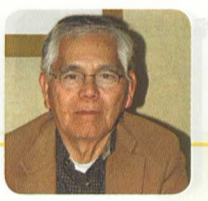
イエス様はまことの神であり、創造主である父なる神とまったく同じ栄光と崇拝とを要求しておられることがわかります。

「わたし（イエス様）と父（主なる神）とは一つです。」（ヨハネ 10・30）

万物は御子（イエス様）にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。（コロサイ 1・16、17）

神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。（ヘブル 1・2、3）







御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。」（ヘブル 1・8）

私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主（イエス様）を十字架につけはしなかったでしょう。（1コリント 2・7、8）

聖書の中心をなす事実は、上に示したことばで表されます。もし、イエス・キリストが神でなければ、希望もなく、救いも存在しないのです。ですから、信じる者は次のような確信を心の中に持っています。

世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。（1ヨハネ 5・5）

イエス様は十二弟子の一人であったトマスに、「見ずに信じる者はさいわいです」と仰せになりました。いうまでもなく、みことばを信じるということです。聖書によれば、イエス様を信じないものは偽り者であり、いのちを持っていません。

偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父（主なる神）と御子を否認する者、それが反キリストです。だれでも御子を否認する者は、御父を持たず、御子を告白する者は、御父をも持っているのです。

あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。（1ヨハネ 2・22〜24）

「あなたは、主なる神のひとり子、キリストですか」とのユダヤの大祭司の問いに、イエス様は、「わたしはそれです」とお答えになりました。






うに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。（ヨハネ 3・20〜21）

たしかに聖書は人間の文字によって書かれました。しかし、信じる、信じないにかかわらず、聖書は人間の考えによって書かれたのではなく、啓示によって与えられた神のことばが人間の手によって書きとめられたのです。事実、聖書をまじめに読めば、人間の考えではこのようなことは書けるはずがないとわかります。聖書は、長い時間にわたって多くの人々の手によって書き続けられましたが、啓示を通して主なる神に教えられた言葉だけが書かれています。ですから、聖書には全巻を通して、主なる神のみこころが記されています。

預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。（2ペテロ 1・21）

聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。（2テモテ 3・16）

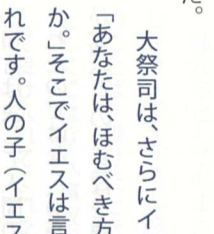
イエス様は、「あなた（主なる神）のみことばは真理です。」と仰せになりました。もちろん、そのことは、旧約聖書に書かれているみことばについて仰せになりました。ですから、旧約聖書は新約聖書と同様に、神のことばであることは明らかです。

それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。（ルカ 24・27）

イエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」（ルカ 24・44）





た。

大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子（イエス様）が、力ある方の右の座につき、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」（マルコ 14・61、62）

主なる神が御子についてあかしされたことは、神が永遠のいのちを与えられたこと、このいのちは御子のうちにあるということです。このあかしを信じることを、神は要求しておられます。信じないものは、神のことばを偽りとするのです。神を偽り者とするこの人たちは罪のうちに滅びます。

これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。（ヨハネ 20・31）

しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。（黙示録 21・8）

疑いの3 「聖書は神のことばなのか」

疑う理由の第三は、聖書が神のことばであるはずがない、というものです。しかし、聖書を真剣にまた誠実に読むことなくして、聖書が神のことばであるはずがない、とは言えないのではないでしょうか。聖書を真剣にまた誠実に読んだうえで、聖書のことばを疑うとすれば、その原因は、聖書のことばを恐れる理由がその人にあることを意味します。聖書を読まずに聖書のことばを疑う者については、論外です。次のみことばはそのことを意味しています。

悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。（ヨハネ 3・20〜21）

たしかに聖書は人間の文字によって書かれました。しかし、信じる、信じないにかかわらず、聖書は人間の考えによって書かれたのではなく、啓示によって与えられた神のことばが人間の手によって書きとめられたのです。事実、聖書をまじめに読めば、人間の考えではこのようなことは書けるはずがないとわかります。聖書は、長い時間にわたって多くの人々の手によって書き続けられましたが、啓示を通して主なる神に教えられた言葉だけが書かれています。ですから、聖書には全巻を通して、主なる神のみこころが記されています。

預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。（2ペテロ 1・21）

聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。（2テモテ 3・16）

イエス様は、「あなた（主なる神）のみことばは真理です。」と仰せになりました。もちろん、そのことは、旧約聖書に書かれているみことばについて仰せになりました。ですから、旧約聖書は新約聖書と同様に、神のことばであることは明らかです。

それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。（ルカ 24・27）

イエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」（ルカ 24・44）

私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。（1テサロニケ 2・13）

聖書のことばを神のことばだと知ると、だれでも希望を持つことができるようになり、元気になります。

主なる神は福音を信じるように、と呼びかけておられます。ですから、だれであっても、「神様、私にはイエス様があなたのひとり子であることは分かりませんが、そのことが明らかになるようにしてください。明らかにしてくだされば、私はイエス様を救い主として受け入れます。」と祈るなら、主はかならずそのことを明らかにしてくださいます。主なる神は、誠実な祈りにはかならず応えてくださるお方です。また十字架の救いを、だれにでも惜しむことなく与えたい、と望んでおられます。福音を疑うことは根拠がないことであるばかりか、取り返しのつかない生涯の損失なのです。■





from Oumi-hachiman
各地の集会から

こちら近江八幡集会で〜す

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ10・11）

近江八幡集会の成り立ちは、やや特異であったと思います。その発足は、私（高村昌彦）が滋賀県に転勤してから二年ほど経った一九七五年四月のことでした。市内にも、聖書を拠りどころに歩んでいる教会はあるのですが、当時私たち夫婦を導いてくださっていた牧師の勧めもあり、「家の教会」（ローマ16・5）を念頭に、わが家で集会を始めることとなりました。その数、六、七人の小さな集いでした。その後、紆余曲折を経て、一九九八年一月二日にベックさんとお話し合いをする機会があり、それからほどなくして、私たちの集まり（当時、近江希望キリスト教会と名乗っていました）は、キリスト集会に仲間入りすることになったのです。このようないきさつから、キリスト集会に加わった当初は、戸惑う人たちもいましたが、今は皆が本当に親しく、共に祈り、賛美し、みことばを学んでいます。



集会は日曜日のほか、火曜日の午後と水曜日の夜に、四つの家庭持ち回りで開いています。火曜日と水曜日の集会では、ベックさんのメッセージを中心に、録音テープを通してみことばを学び、一人ひとりが祈り、それぞれが祈りの課題を出し合っています。また、私たちの集会は、夫婦そろって集会にみえる方が比較的多く、後述する枚方集会も加えると十二組になります。さらにその輪が広がるように、そして、家族がみな救われるように――、これが私たちが祈り続けていることです。

大阪の枚方市に、二十年以上続いている「枚方集会」があります。この集会は、近江八幡から枚方へ転居された浅井浩さんと奥様が始められたものです。開業医という多忙な身で、日曜日と木曜日（婦人会）に自宅を開放して集会を開いておられます。枚方と近江八幡は、距離的には離れていますが、お互いの交流は途絶えることなく続き、今日に至っています。枚方集会の特徴は、幼稚園児のときに日曜学校に来ていた子供たちが数人、青年に成長した今も続けて礼拝に出席していることです。この実例はよい証しであり、私たちの励みになっています。

近江八幡は古い町並みが残り、また風光明媚なところですが、神社仏閣も多く、市民の生活もそれに深く結びついています。そのため、聖書に忠実に生きようとするとき、戦いもありますが、主に守られ、福音を力強く証ししていけるようにお祈りください。（高村昌彦）

[インフォメーション・ボックス]

Information Box

JHON 3.16

ロス・キャンプとヨハネ3章16節

その一。

みことばで手荷物検査をパス

二〇〇七年11月22日朝、米ロサンゼルス国際空港。よろこびの集い参加のため日本から到着した一行が、手荷物検査を受けた時のことです。入国の目的を問われた一人が「私たちはキリスト者。在米の仲間とバイブル・キャンプを持つためです」と答えると、検査官はいきなり「ヨハネ 3.16」とマジック・ペンで書いたのです。日本語に訳せばヨハネ3章16節。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためです。」という、とびきり有名な聖句を記した箇所です。それで、たどたどしい英語でしたが、その内容を口にしたところ、にっこり笑って「通ってよろしい」という身振り。みことばが取り持ってくださった、クリスチャン検査官との一瞬の交わり、フリーパスでした。

その二。

十字架刑の巨大絵画

キャンプ初日、日本の参加者は空港から、フォレストローン記念公園のキリスト磔刑・復活館（Hall of The Crucifixion-Resurrection）に直行しました。お目当ては、イエスさまが十字架につけられたゴルゴタの丘の光景を描いた横60㍍、縦14㍍の巨大壁画です。ポーランドの画家、J・スタイカの代表作で、一九〇四年にセントルイス博覧会のために持ち込んだものを、後年、同記念公園創設者のH・イートン博士が購入、展示したのです。この絵は、大きさもさることながら、描写の精密さに目を奪われます。イエスさまはじめ、一緒に処刑された二人の犯罪人、イエスさまの母マリヤ、愛弟子ヨハネ、ペテロ、サウロ（パウロ）と師のガマリエル、マグダラのマリヤ、ラザロと姉妹のマルタ、クレネ人シモン、ニコデモ、アリマタヤのヨセフ、大祭司カヤパとアンナス、百人隊長、刑の執行人…、さらには二百人を超す群衆の姿が描かれています。そして、磔刑図の説明文の末尾に付されていたのも「ヨハネ3章16節」のみことばでした。ここを訪れた人々が「イエスさまへの信仰を新たにして、このみことばを心に響かせながら帰途に就く」ことを創設者は祈っていた、というのです。



イエス様を実感した車内の出来事

僕は今年二月、中学受験の日に改めてイエス様の存在を実感しました。

その日は僕の十二歳の誕生日の翌日でしたが、受験会場へ行く電車の中で、変なおじさんが近づいてきて「窓から富士山が見えるよ」と声をかけたのです。おじさんが指す方向には、とてもきれいな富士山が見えました。最初は少し気味の悪かったその人は、クリスチャンでした。横にいた父が、自分たちもイエス様を信じていて、僕が日曜学校へ通っていることを話すと、おじさんは聖書を取り出し、みことばを書いたしおりを僕にくれました。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」というヨハネの福音書1章14節の箇所でした。僕はうれしくなり、この時、イエス様はいつでも、どのような時でも守ってくださると感じました。そして、落ち着いて試験を受けることができました。

この出来事で僕は、本当にイエス様はついていてくださり、守ってくださるのだと実感し、その存在を心の底から信じました。試験も合格し、イエス様に心から感謝しています。（古田蒔人）

集会インターネット配信について

「私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。（詩篇 22:22）」

キリスト集会では昨年よりインターネット回線を通じて吉祥寺集会の日曜日礼拝・福音メッセージおよび火曜日集会の様子を配信してきました。この奉仕は種々の事情により各地の集会に集うことの困難な、主として地方・海外の兄弟姉妹のために実現されたものです。

礼拝はその場に参加し、ともに祈り、賛美し、聖餐にあずかることにもっとも大切な意味があります。したがって、このインターネット配信に参加することは礼拝そのものの代わりになるものではありませんが、兄弟姉妹の交わりを補助する目的で活用いただけましたら幸いです。



http://shukai.jpn.ph/ トップページ

■集会時間以外には画像は配信されていませんので、ブランク画面になります。そのときには集会が始まる時間までお待ちになってから、再接続してください。

■現在、Ｍａｃによる受信には不都合があります。海外からの受信も地域によっては難しいようです。その他、受信や接続に問題がありましたら、左記のメールアドレスへご連絡ください。最近インターネット配信への参加者が急増しているため、回線が不安定なことがあり、画像が停止したり、中断するなどのご不便をおかけすることがあります。ブラウザの「更新」ボタンを押すか、Ｆ５キーを押すと再読み込みされて再び接続されます。回線状況により途中で切断された場合にも、同様の方法で復帰できます。うまくいかない場合など左記のメールアドレスにご連絡ください。

■なお、吉祥寺集会所にて配信業務（操作）などのお手伝いをいただける方は左記のメールまでご連絡ください。



ご存知ですか、パッション・フラワー（受難の花）

写真は、パッション・フラワーと呼ばれる、ブラジル原産トケイソウ属のつる性多年草が咲かせる花です。宮崎集会の井上勲さんが撮影、提供してくださいました。

パッション（受難）の名は、南米に渡ったスペイン人宣教師が、この花の特異な形からキリストの受難を想起したことに由来しています。房毛のような小花冠が茨の冠を、三つの花柱が十字架に打ちつけた釘を、巻きひげはむちを、葉は槍を、それぞれ象徴しているように見えた、というのです。

トケイソウ属は四〇〇種以上が知られ、現在は熱帯、亜熱帯の各地で栽培され、果実が食用になっているものもあります。井上さんは近所からいただいた苗を自宅庭で育て、２年目に開花した後で、パッション・フラワーの名を知ったそうです。なお、トケイソウの名は花形を時計の文字盤に見立てたものです。

■**アクセスの手順**は、まず以下のアドレスにアクセスしてテスト画像（リンデ：実を結ぶ命）をご覧になることができるかどうかご確認ください。

http://shukai.jpn.ph/





音声が流れ、動画を見ることができます。



火曜日集会の配信の様子

■日曜礼拝の配信

配信時間は以下のとおりです。

午前：10：30より
午後：14：00より
夜　：19：00より

御代田喜びの集いも開催期間中は福音集会・日曜礼拝が配信されます。

■火曜日集会の配信

配信時間は午前10：30ごろからです。

火曜日集会の視聴にはIDとパスワードが必要です。

以下のメールアドレス（集会インターネット配信連絡専用）へ氏名、所属集会、連絡先をご記入の上お申し込みください。

ネット配信に関するお問い合わせ　Eメール：shukai_mail@yahoo.co.jp

「家庭集会でいただいた恵み」の体験記をお寄せください

「主は生きておられる」15号では、家庭集会の特集記事を予定しています。

家庭集会は、キリスト集会の様々な集いの中で一番身近なものです。イエス様を知らない方々も、気軽に参加できる場となっています。実際、「初めて聖書の福音に触れたのは家庭集会だった」「家庭集会に出かけたことが救われるきっかけになった」という人が少なくありません。家庭集会の恵みは、場所を提供してくださっている方々も、いただいているのではないでしょうか。

皆様が体験された「家庭集会の恵み、喜び」、「忘れ難い家庭集会の思い出」などを短く（できれば五百字以内に）まとめて、下記の要領でご送付くださるようお願いします。

宛先　●郵送：〒181-0005　東京都三鷹市中原 3-1-55　清水 洋一
●ファックス：0422 - 47 - 4564　●メール：yoichi-s@kzh.biglobe.ne.jp

氏名、所属集会名、連絡先（メールアドレスか電話番号）を書き添えてください。
締め切り９月１日



しずんだキルシュクーヘン

キルシュとはチェリーのことで、ドイツでも人気の果物のひとつです。そのまま食べるのはもちろん、ジャムやお菓子、肉料理などに添えるソースの材料としてもよく使われます。

このケーキは、生地を焼く前に上にのせたチェリーが焼き上がりの時には下の方にしずむので「しずんだキルシュクーヘン」と呼ばれています。ほんのり甘酸っぱいチェリーは、プレーン生地にもココア生地にもよく合うので、両方のレシピをご紹介しましょう。作り方はとてもシンプルなので、ケーキを焼くのはなんとなく大変そうと思っていた方も、ぜひ作ってみてくださいね。



材料

直径26cmの丸型1個分
または、直径20cm程度の丸型2個分

《すべて常温にしておく》

チェリーのシロップ漬け缶詰　１缶（約300g）
（生のダークチェリーでもよい）
卵　５個
砂糖　180ｇ
バター（有塩でよい）80g
小麦粉　180g
ベーキングパウダー　小さじ２

＜ココア生地用＞
ココア（無糖）　大さじ１
砂糖　大さじ１


チェリー缶

道具

型：ここでは20cmの丸型を２個使用
その他：泡立て器　ボール２つ　へら

作り方

《下準備》

a. 小麦粉とベーキングパウダーをあわせてふるっておく
b. 卵は卵黄と卵白に分けておく
c. チェリー缶の汁気を切っておく（生のチェリーを使う場合は種を除いておく）
d. 型にバター（マーガリンでもよい）を塗っておく
e. オーブンを180度にあたためる

《メレンゲを作る》



1. 卵白を泡立て器で泡立てる
角が立ち始めたら
砂糖の半量を
少しずつ加えながら
泡立てる
ポイント　角がしっかり立ち
ボールを逆さにして
落ちてこなければＯＫ



《生地を作る》



2. 常温でやわらかくなった
バターを泡立て器で
クリーム状に練る



3. 残りの砂糖を2～3回に
分けて加えて混ぜる
ポイント　この段階でふっくら
白っぽくなるまで
ていねいに混ぜる



4. 卵黄を２～３回に分けて
加えて混ぜる



5. メレンゲと粉を
半量ずつ加え、
生地をなじませるように
へらでそっと混ぜる



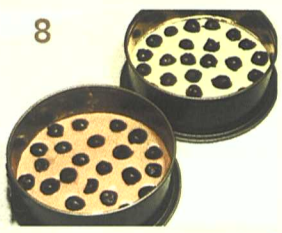
6. 残りのメレンゲと粉を加え、
泡をつぶさないように
へらでさっくりと混ぜる

《生地の半量をココア味にする》



7. 生地の半量をメレンゲが
入っていたボールに戻し
ココアと砂糖を大さじ1ずつ
加えてへらでそっと混ぜる

《型に生地を入れて焼く》



8. 型に生地を流し入れて
へらなどで平らにし
チェリーを均等に置く

9. 180度のオーブンで
40～50分焼く
ポイント　オーブンや型によって
焼く時間が異なるので
竹串をさして確認
竹串に生地が付いて
こなければ焼き上がり



10. 焼き上がったら
型から出して冷ます

オーブンの大きさなどにより一度に2個焼けない場合は、1個ずつ焼く。生地を置いておく場合、暑い季節はラップフィルムをかけて冷蔵庫へ。



すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、
すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ 6:18）

2008年	7月					
	6日	13日	20日	27日	3日	10日
北海道	古田K	岩崎	藤原N	羽石	片桐	藤田E
青森		棚村		佐山	藤田E	
仙台／盛岡	増森	松見	松田	福島	深沢	奥
新潟	江藤	黒沢	山下	重田H	北原T	山徳
宇都宮	谷口	藤井	金井	中込	羽石	芳竹
日立	岩本	柿沼Y	上田	平山	和田S	羽石
土浦	小川	秋本	松見	大場	蘇畑	青木
川越	野田	岩上	岩本	古田K	代田	野口T
春日部	藤井	辻田H	鈴木H	小々馬	川股	黒澤
印旛／鹿島	青柳	藤田T	川股	松尾	山口I	末村
市川	小池	大場	小山	滝	会沢	伊牟田
10:30	ベック	重田S	白石K	青柳	寺田	飽戸
14:00 東京	黒澤	水渡	浅野	古屋	中込	藤本
19:00	小島	中山Ch	染野	松見	久田	岡本M
横浜	兵藤	酒井M	牧野	香川	大須賀	和田S
相模原	神沢	黒田	相馬	石井A	後藤T	江藤
御代田	長岡	織田	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ
伊那	植原	熊谷	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ
富山	大下	仲井間	野口O	和田Y	藤本	浅野
高山	平		大下			大下
伊豆	加藤S		菊池		福島	
藤枝		内藤		野田		小林
掛川	大塚		秋本		染野	
名古屋／豊橋	辻田H	今村	那須	和田S	稲森	和田Y
石川／福井	植原		平		山徳	
近江八幡		古田K	高村	藤原T	高村	河辺
大阪		瀬川	小久保	山科	広田	藤原T
芦屋	中山K	松井	高村	渡辺S	富田	清水Y
西神	広田	渡辺S	岡本M	古田M	池島	森島
島根	藤本	キャンプ	黒田R		福代	
山口／広島／徳山	渡部	中山K	森島	瀬島	香川	森田
岡山	広橋	キャンプ	清水N	岩下	渡辺S	内田H

8月						
17日	24日	31日	7日	14日	21日	28日
川股	岩本	藤本	白石K	菅原	岡本M	青柳
高田	立之	片桐	小池	藤田E	キャンプ	キャンプ
富田	古田M	鈴木T	松下	清水Y	片桐	高田H
滝	川股	吉田	鈴木H	野田	松見	長岡
藤田E	吉田	棚村	田中J	松見	南村	斉藤
北原T	稲森	小野沢	和田S	藤田T	浅野	南村
江田	白石Y	飯島H	藤田T	大庭	上野	御任
飯島H	大庭	水渡	宮田	西村	吉田	上田
宮田	伊牟田	槇野	白石Y	染野	江田	会沢
青柳	柿沼Y	大沢A	飽戸	田尾	藤枝	小川
平山	江藤	辻田H	清水Y	西川	野田	酒井Ch
古田K	野口O	蘇畑	柿沼Y	佐山	野口N	富岡
中山Ch	山本	藤田T	石塚	中村	田中J	奥
菊池	旭	立之	黒田	菊地	和田Y	山田K
キャンプ	キャンプ	江田	奥	牧野	水渡	大高
キャンプ	キャンプ	田中J	野口O	キャンプ	平山	飽戸
松本Y	瀬川	平	末永	キャンプ	織田	山田M
		キャンプ	平井	旭	山下	大下
加藤S		青柳		兵藤		加藤S
	岩下		金子		青柳	
金子		岩上		和田Y	水渡	
津田	長岡	滝	上田	会沢	辻田M	松本S
		キャンプ		長岡	植原	
高村	平山	高村	青柳	吉田	岩崎	高村
池島	高橋Y	小島	岡本M	寺田	山徳	中山K
小久保	高村	野口O	森島	滝	久田	藤原T
中山K	元永	山科	吉田	富田	藤原N	瀬川
		瀬島	キャンプ	藤井	岩崎	
児玉	芳我	上田	キャンプ	岡本M	秋本	山口H
内藤	藤原T	岩本	鈴木T	武井	後藤T	内藤

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、
すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ 6:18）

メッセージ当番表

2008年	7月					
	6日	13日	20日	27日	3日	10日
徳島	池田	浅野	山本	西川	小島	野田F
坂出	小野沢	キャンプ	会沢	森島	内田H	古田K
高知	野間	岡本M	古田K	小島	金子M	大須賀
松山／西条	藤原N	近森	内藤	野田F	和田Y	寺田
福岡／別府	庄野	中野	清水Y	浅野	小山田	岡崎
長崎／佐世保	加藤M	重枝	中込	松田	庄野	小池
宮崎／小林	清水N	河辺	山口H	菊池	桜本	武井
鹿児島／熊本	小山田	和田Y	重枝	庄野	別所	須藤T
沖縄／宮古	芳竹	平良K	白石Y	長岡	飯守	喜屋武
バンコク						
米国						
キャンプ		倉敷		御代田	御代田	御代田
		12～13日	18～20日	25～27日	1～3日	8～10日

祈り会	7月					8月
	3日	10日	17日	24日	31日	7日
吉祥寺	山徳	和田S	小野沢	青柳	藤本	重田H
木曜日 19:00	81.1-5	81. 6-14	81.15-16	82. 1-4	82. 5-8	83.1-4
詩篇						

2008年 喜びの集い
下半期スケジュール

8月
1(金)～ 3(日) 御代田
8(金)～10(日) 御代田
15(金)～17(日) 御代田
22(金)～24(日) 御代田
30(土)～31(日) 石川／福井

7月
12(土)～13(日) 倉敷
18(土)～20(日) 御代田
25(土)～27(日) 御代田

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、
すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ 6:18）

メッセージ当番表

9月				8月		
28日	21日	14日	7日	31日	24日	17日
野間	小野沢	北原	中山K	神沢	平井	広橋
内田H	武井	野田F	染野	野間	広橋	池田
岡本H	近森	青柳	脇岡	飯守	蘇畑	窪内
国川	岩上	白石K	北原	平山	野間	光藤
キャンプ	今村	江藤	野田	和田Y	松井	重枝
キャンプ	山口H	上田	辻田H	菅原	辻田M	別所
キャンプ	別所	田中J	菅原	羽石	藤原N	高橋I
キャンプ	北原	上野	古田M	岩崎	古田K	加藤M
清水Y	飽戸	古田M	蘇畑	仲井間	代田	平良M
別府	盛岡	御代田	広島	石川／福井	御代田	御代田
27～28日	20～21日	12～14日	6～7日	30～31日	22～24日	15～17日

9月				8月		
25日	18日	11日	4日	28日	21日	14日
山本	佐山	牧野	芳竹	岡本M	小島	清水Y
85.1-3	84.10-12	84. 8-9	84. 5-7	84.1-4	83. 9-18	83. 5-8

2008年 喜びの集い
下半期スケジュール

11月
8(土)～ 9(日) 沖縄
14(金)～16(日) 御代田
20(木)～25(火) ロサンゼルス

12月
6(土)～ 7(日) 沖縄
31(水)～1/2(日) 御代田

9月
6(土)～ 7(日) 広島
12(金)～14(日) 御代田
20(土)～21(日) 盛岡
27(土)～28(日) 別府

10月
8(水)～15(水) フィリンゲン
16(木)～23(木) フィリンゲン

9/17
上原 克騰・美也子







11/17 熊本 智春・充代

11/18 三浦 誠・麻衣子

あなたの道を主にゆだねよ。
主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
(詩篇 37・5)

8/18
芳賀 高洋・裕子



6/23
鳥越 良・道子



4/29 野間 臨太郎・真理子



Wedding 結婚式

2007年

結婚式と葬儀のご報告



2007年
2/21　庄野 中
5/30　友寄 英俊
9/24　大戸 定治
9/25　濵田 利通
9/27　緒方 友子



10/02　田中 博樹
10/27　石亀 田美子
11/02　エドワーズ 田中 フランキー
11/09　前田 美穂子
11/28　蘇畑 瑠璃子
12/12　門垣 榮子
12/28　河野 道有







Funeral 葬儀







2008年
1/05　唐澤 喜信
1/15　田中 喜美子
1/16　久馬 武夫
2/01　今井 和子
2/02　竹原 登代子
2/05　小暮 久子
2/11　大江 暢博









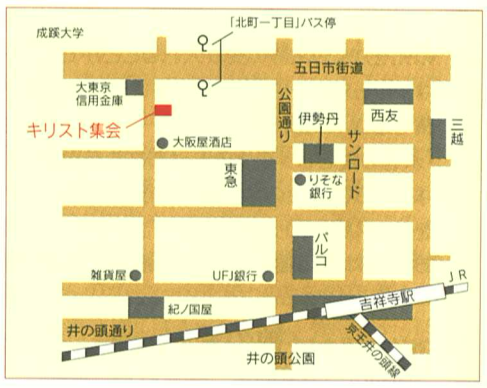


「見よ。神の幕屋が人とともにある。
神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。
また、神ご自身が彼らとともにおられて、
彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。
もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。
なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」 (黙示 21・3、4)

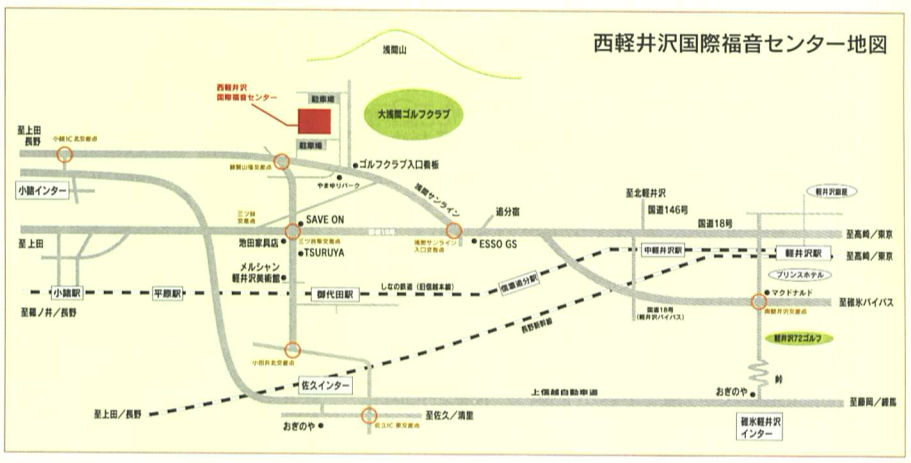
キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450 (集会所)

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 14:00 / 19:00
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:30
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



吉祥寺キリスト集会地図



西軽井沢国際福音センター
[電話]　0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話]　0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

■キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にする人々の集いです。

■キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

■会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

■月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名です。
だれがいくらささげたかは主のみがご存知です。

■日曜日の礼拝では、祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます(礼拝と福音集会の順序が逆になる場合もあります)。

■家庭集会は、家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音のよろこびを伝える集いです。世界で百箇所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

■「よろこびの集い」は、西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集る大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録（第1～3巻）
ゴットホルド･ベック著
第1巻300円 / 第2巻250円 / 第3巻400円

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の婦人のための学び会で、約1 年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1 巻には黙示録の1, 2, 3章、第2 巻には4～7 章、第3 巻には8～15章、第4 巻には16～最後までが、それぞれおさめられています。



光よあれ —私たちは主のもの
証しシリーズ（第1～9集）
第1集330 円 / 第2集350 円 / 第3集330 円
第4集350 円 / 第5集380 円 / 第6 集380 円
第7集400 円 / 第8集400 円 / 第9 集400 円

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9 集まであり、実に596 人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。このシリーズは第9集までで、すでに50 万部を超えてひろく愛読されています。

※上記の価格は発行当時のもので、本の表紙にも同じ価格が記されていますが、現在は各集とも半額になっています。

■本などの注文はハガキで
キリスト集会で発行している本、雑誌などの注文は下記へハガキでしてください。
電話での注文は、お控えください。
注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11　吉祥寺キリスト集会



実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ
ゴットホルド・ベック編著　330 円

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

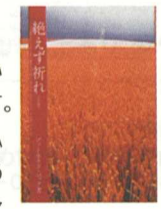
なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック著　各300 円

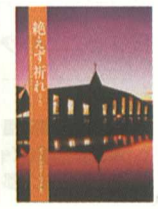




吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ（上・下巻）
ゴットホルド･ベック著　上巻400円 / 下巻250円





主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれるとびらを開けるのです。祈りのほんとうの大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会のご案内

日曜礼拝、福音集会、家庭集会が行われる場所、
及び各地のキリスト集会の窓口の連絡先です。

西軽井沢国際福音センター
0267 - 32 - 6400(代)　長野県北佐久郡御代田町塩野450 - 15　〒389 - 0201
西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
0267 - 32 - 6444　長野県北佐久郡御代田町塩野450 - 33　〒389 - 0201
吉祥寺キリスト集会（集会所）
東京都武蔵野市吉祥寺本町4 - 9 - 11　〒180 - 0004

■ 北海道
小山内茂　011 - 846 - 8636　北海道札幌市白石区南郷通7丁目南1 - 10　〒033 - 0022
佐藤幸斎　090 - 2053 - 9766 北海道上川郡美瑛町美瑛原野五線　〒071 - 0239
■ 東北地方
深沢門太　019 - 692 - 5056　岩手県岩手郡雫石町西安庭30 - 23 - 4　〒020 - 0572
高田英彦　022 - 391 - 3588　宮城県仙台市青葉区向田1 - 6　〒989 - 3215
須藤さき子　0248 - 76 - 5373　福島県須賀川市季の郷316　〒962 - 0405
■ 関東地方
斉藤眞吾　028 - 656 - 3556　栃木県宇都宮市下栗町484 - 30　〒321 - 0923
稲森創作　028 - 765 - 3481　栃木県那須塩原市大原間西1 - 17 - 2 パストラル那須201　〒329 - 3157
黒田清隆　0272 - 68 - 2622　群馬県前橋市西大室町1324　〒379 - 2104
御任克彦　0270 - 24 - 3090　群馬県伊勢崎市大手町26 - 1　〒372 - 0048
藤田瑛二　0294 - 37 - 0116　茨城県日立市西成沢町2 - 15 - 10　〒316 - 0032
槇野忠秋　0294 - 73 - 2525　茨城県常陸太田市天神林町870 - 2　〒313 - 0049
◎ 鹿嶋キリスト集会（集会場所）
0299 - 83 - 5911　茨城県鹿嶋市宮中325 - 1　鹿嶋勤労文化会館
（問い合わせ先：山口一郎　029 - 251 - 2026　水戸市西原3 - 3 - 47　杉山方）
南村恵三　0298 - 74 - 2401　茨城県牛久市上柏田3 - 46 - 21　〒300 - 1232
石井啓司　0297 - 48 - 5795　茨城県守谷市みずき野8 - 4 - 6　〒302 - 0121
江田昌弘　0495 - 22 - 0604　埼玉県本庄市北堀560 - 58　〒367 - 0031
竹沢　規　048 - 833 - 8037　埼玉県さいたま市浦和区上木崎6 - 36 - 15　〒330 - 0071
吉田　浩　048 - 736 - 9723　埼玉県春日部市南3 - 15 - 7　〒344 - 0064
藤井保夫　048 - 761 - 2936　埼玉県春日部市栄町1 - 212 - 8　〒344 - 0058
岡崎龍夫　0492 - 64 - 4469　埼玉県ふじみ野市西2 - 7 - 18　〒356 - 0005
堤　堅太　0492 - 34 - 5711　埼玉県川越市笠幡2744 - 2　〒350 - 1175
白石康夫　048 - 773 - 0435　埼玉県上尾市東町1 - 13 - 9　〒362 - 0031
上野　亘　048 - 470 - 4884　埼玉県志木市館1 - 6 - 12 - 703　〒353 - 0006
古田公人　04 - 2924 - 5732　埼玉県所沢市山口1000 - 4　〒359 - 1145
植本條文　0474 - 97 - 1684　千葉県印旛郡白井町清水口1 - 5 - 2 - 102　〒270 - 1435
中留和征　0476 - 98 - 2686　千葉県印旛郡印旛村吉高1886 - 105　〒270 - 1603
林　功雄　043 - 488 - 1098　千葉県佐倉市吉見509 - 2　〒285 - 0834
桶田隆一　0475 - 22 - 0373　千葉県茂原市茂原1624　〒297 - 0026
青山裕子　0471 - 64 - 2643　千葉県柏市東柏1 - 6 - 17　〒277 - 0017
金杉民子　04 - 7169 - 8211　千葉県柏市あかね町4 - 21　〒277 - 0027
小川一夫　0473 - 26 - 8449　千葉県市川市菅野3 - 22 - 6　〒272 - 0824
水嶋節子　0473 - 67 - 4628　千葉県松戸市栄町6 - 418 - 2　〒271 - 0062
会沢道広　043 - 251 - 8874　千葉県千葉市稲毛区園生町158 - 9　〒263 - 0051
■ 東京都
中込　豊　03 - 3551 - 0201　東京都中央区新川2 - 23 - 8 - 903　〒104 - 0033
唐沢梅子　03 - 3269 - 2937　東京都新宿区赤城下町53 - 19　〒162 - 0803
佃　たえ子　03 - 3793 - 6086　東京都目黒区碑文谷6 - 10 - 10　〒152 - 0003
飯島信太郎　03 - 3712 - 7846　東京都目黒区上目黒4 - 33 - 17　〒153 - 0051

柿沼義一　03 - 3402 - 1407　東京都港区麻布十番1 - 5 - 17　〒106 - 0045
近森大志郎　03 - 5499 - 2035　東京都世田谷区東玉川2 - 5 - 7　〒158 - 0084
松田　博　03 - 5393 - 5595　東京都練馬区谷原6 - 6 - 13　〒177 - 0032
飯守恪太郎　0422 - 22 - 3483　東京都武蔵野市吉祥寺北町1 - 27 - 15　〒180 - 0001
田中順冶　0422 - 53 - 8190　東京都武蔵野市中町3 - 4 - 4武蔵野ビューハイツ609　〒180 - 0006
染野茂夫　0423 - 85 - 1841　東京都小金井市中町1 - 15 - 17　〒184 - 0012
岡本雅文　042 - 388 - 1898　東京都小金井市本町2 - 17 - 10　〒184 - 0004
黒澤錬二　070 - 6687 - 5072 東京都国立市富士見台2 - 10 - 8　〒186 - 0003
本田謹子　042 - 497 - 4133　東京都西東京市向台町4 - 15 - 6　〒188 - 0013
古田　稔　0424 - 42 - 5288　東京都調布市深大寺北町7 - 28 - 5　〒182 - 0011
蘇畑卓郎　0426 - 92 - 5150　東京都八王子市みつい台1 - 24 - 12　〒192 - 0014
阿部榮子　042 - 726 - 4593　東京都町田市木曽町520 - 7　〒194 - 0033
岩本秀造　0428 - 31 - 8651　東京都青梅市新町3 - 12 - 7 - 701　〒198 - 0024
今川　務　0424 - 73 - 2494　東京都東久留米市滝山3 - 4 - 18　〒203 - 0033
辻田浩康　042 - 346 - 5080　東京都小平市小川町1 - 445 - 1　ガーデンハイツ1 - 413　〒187 - 0032
大庭俊明　042 - 397 - 8408　東京都東村山市富士見町1 - 12 - 2 ヴィラージュ･ヴェール9−505号　〒189 - 0024
竹本　隆　042 - 375 - 0121　東京都多摩市一ノ宮3 - 7 - 5　〒206 - 0022
■ 神奈川県
◎ 横浜キリスト集会所
045 - 362 - 2145　神奈川県横浜市旭区二俣川1-45-78　トークスビル3､4階　〒241 - 0821
山田　健　045 - 825 - 2432　神奈川県横浜市戸塚区品濃町566-1-601　〒244-0801
酒井正人　045 - 825 - 3509　神奈川県横浜市戸塚区平戸3 - 40 - 15　〒244 - 0802
黒田英文　045 - 971 - 8836　神奈川県横浜市青葉区みたけ台8 - 22　〒227 - 0047
◎ 相模原キリスト集会所　（問い合わせ先:立之　042 - 771 - 2822）
神奈川県相模原市横山3 - 33 - 6　スターヒルズ 屋上　〒229 - 1122
神沢　毅　042 - 743 - 6732　神奈川県相模原市御園1 - 18 - 55　〒228 - 0817
神田啓子　0467 - 54 - 6917　神奈川県茅ヶ崎市本村4 - 22 - 14 - 808　〒253 - 0042
竹原庸光　0463 - 87 - 3473　神奈川県秦野市渋沢3 - 19 - 9　〒259 - 1322
香川　哲　0465 - 43 - 2534　神奈川県小田原市小竹781 - 22　橘団地23 - 2　〒256 - 0802
■ 中部地方
佐藤耕作　0254 - 22 - 1971　新潟県新発田市富塚町1-3-17　〒957-0062
仲井間憲成　0765 - 52 - 3291　富山県黒部市天神新504 - 1　〒938 - 0042
長岡健次　026 - 278 - 8655　長野県長野市松代町皆神台153　〒381 - 1223
織田史彦　026 - 243 - 7877　長野県長野市吉田4 - 6 - 24　サーバス北長野309　〒381 - 0043
山田正博　0263 - 78 - 4728　長野県松本市梓川梓5455 - 4　〒390 - 1702
宮城昭代　0265 - 78 - 2284　長野県伊那市御園中部5　〒396 - 0000
加藤　信　0557 - 51 - 5008　静岡県伊東市八幡野1250 - 41　〒413 - 0232
芝田米蔵　054 - 635 - 0195　静岡県藤枝市前島2 - 24 - 24　〒426 - 0067
大塚二郎　0537 - 23 - 7465　静岡県掛川市水垂1116 - 17　〒436 - 0061
篠塚智子　0543 - 67 - 7329　静岡県静岡市清水区天神1 - 11 - 17　〒424 - 0809
吉野千鶴子　054 - 287 - 3531　静岡県静岡市駿河区中田本町1 - 43　〒422 - 8043
倉橋宣行　0564 - 32 - 4948　愛知県岡崎市東大友町字松花28 - 106　〒444 - 0903
足立秀子　0533 - 68 - 2035　愛知県蒲郡市神の郷町下向山75 - 7　〒443 - 0007
辻田雅彦　0565 - 31 - 2745　愛知県豊田市平芝町5 - 23 - 2　〒471 - 0065
松本昭二　052 - 804 - 6016　愛知県日進市香久山3 - 301 - 1　ライフウェルズ 3 - 403　〒470 - 0134
津田　修　052 - 806 - 7491　愛知県名古屋市天白区高宮町209　〒468 - 0031
那須　信　0568 - 28 - 3490　愛知県西春日井郡豊山町青山1231　〒480-0201
大下直弘　0577 - 33 - 3559　岐阜県高山市三福寺町777 - 2　〒506 - 0807
前山忠陽　0762 - 44 - 7461　石川県金沢市泉野町3 - 1 - 25　〒921 - 8034

2008年
4月1日現在

■ 関西地方

松浦　都　0749-24-6874　滋賀県彦根市城町1-6-36　〒522-0068
西山　諒　0748-32-4368　滋賀県近江八幡市池田本町930-32　〒523-0043
高村昌彦　0748-32-3623　滋賀県近江八幡市土田町828-2　〒523-0082
藤後健二　077-529-2362　滋賀県大津市比叡平3-11-5　〒520-0016
加藤正光　075-781-3466　京都府京都市左京区岩倉中在地町29　B-402　〒606-0027
小笹　靖　0774-62-1795　京都府京田辺市草内西垣内町27　〒610-0311
久枝信一　072-689-1408　大阪府高槻市松が丘3-2-24　〒569-1031
松井　一　0729-93-8779　大阪府八尾市南久宝寺2-58-40　〒581-0076
池島精一　06-6328-1071　大阪府大阪市東淀川区瑞光1-14-2　〒533-0005
高橋義夫　06-6658-1775　大阪府大阪市西成区千本中1-5-9　〒557-0054
本多　功　06-6939-3980　大阪府大阪市城東区古市3-1-2-801　〒536-0001
広田裕彦　0743-74-0237　奈良県生駒市俵口町363-5　〒630-0243
山科一雄　0743-75-0096　奈良県生駒市俵口町623-6　〒630-0243
◎ 芦屋キリスト集会所　兵庫県芦屋市朝日ヶ丘町6-31　〒659-0012
奥田俊夫　0797-81-1694　兵庫県西宮市宝生ヶ丘1-12-7　〒669-1112
森島左武郎　0798-65-3719　兵庫県西宮市高木東町12-14　〒663-8033
渡辺　進　078-302-3093　神戸市中央区港島中町6-14　ポートピアプラザD棟803　〒650-0046
岩永邦彦　0794-82-9313　兵庫県三木市自由が丘本町3-467-3　〒673-0424

■ 中国地方

森　正樹　0864-72-9084　岡山県倉敷市菰池3-3-14　〒711-0932
太宰彰夫　086-473-3629　岡山県倉敷市児島柳田町822-1　〒711-0936
岡本　悟　08694-8-3754　岡山県岡山市金岡西町1181-7　〒704-8193
渡部弥寿志　0823-31-3441　広島県呉市瀬戸見町12-8　〒737-0834
児玉尚志　082-224-5851　広島県広島市東区牛田東4-3-14　〒732-0063
佐々木健二　082-848-3007　広島県広島市安佐南区大塚西6-14-1 ヒルズパレット1番館1301　〒131-3167
中村輝夫　0833-46-3273　山口県下松市東陽2-17-2　〒744-0043

■ 四国地方

内田厚純　0877-45-9159　香川県坂出市笠指町4-5　〒762-0038
高嶋佳紀　087-865-3020　香川県高松市三条町1-5　〒761-8072
◎ 徳島キリスト集会所　渭東コミュニティセンター
野間義明　088-698-9251　徳島県板野郡北島町新喜来字下竿1-7　〒771-0207
竹内悦子　088-842-7248　高知県高知市横浜新町5-1301　〒781-0241
岡本広海　08875-6-1940　高知県香美郡野市町西野2121-2　〒781-5232
竹本真夫　08875-2-1794　高知県香美郡土佐山田町東本町2-2-45　〒782-0031
藤田光男　0897-53-2765　愛媛県西条市大町856-1　〒793-0030
光藤英彦　089-923-8503　愛媛県松山市白水台2-8-4　〒791-0113

■ 九州地方

庄野直勝　092-885-2088　福岡県福岡市西区愛宕浜2-2-6-201　〒819-0013
重枝宏英　092-873-5870　福岡県福岡市城南区東油山4-7-2-1218　〒814-0155
石崎　豪　092-872-7160　福岡県福岡市城南区南片江5-20-22　〒814-0143
橋本昭雄　093-471-6730　福岡県北九州市小倉南区中曽根東4-2-7　〒800-0213
宮崎敏雄　0940-32-9469　福岡県宗像市泉ヶ丘2-35-2　〒811-4142
香月信次　0940-43-4021　福岡県福津市中央4-8-18　〒811-3217
別所諄之　0944-51-8489　福岡県大牟田市久福木253-2　〒837-0915
渕上和博　0942-33-8722　福岡県久留米市本町17-24　〒830-0044
江口武明　0944-55-0632　福岡県大牟田市笹原町2-97-11　〒836-0884
重枝　学　0967-32-4154　熊本県阿蘇郡阿蘇町乙姫2070-12　〒869-2226
平野精蔵　096-222-7723　熊本県熊本市飛田3-8-57　〒861-5514
沼津孝雄　096-367-0133　熊本県熊本市花立2-6-24　〒861-2118

加藤正道　096-273-3829　熊本県熊本市改寄町2371　〒861-5501
小山田忠功　0975-32-6313　大分県大分市下八幡六組一1　〒870-0807
工藤　敏　097-582-2765　大分県由布市庄内町野畑1473　〒879-5422
歳川譲治　0957-52-0919　長崎県大村市上諏訪町1059-12　〒856-0023
川口純子　0958-27-6695　長崎県長崎市西坂町7-27　〒850-0051
高橋　勇　0984-23-6880　宮崎県小林市大字細野1588-5　〒886-0004
安藤正和　099-257-8994　鹿児島県鹿児島市田上4-22-5　〒890-0034
永川　誠　0995-65-6414　鹿児島県姶良郡姶良町下名1062-17　〒899-5543
竹田保洋　0996-88-6374　鹿児島県出水郡長島町蔵之元1833-2　〒899-1301

■ 沖縄

◎ 沖縄キリスト集会所　098-933-9608　沖縄県沖縄市山里2-4-2　〒904-0033
喜屋武昌信　098-933-0284　沖縄県沖縄市久保田1-25-3　〒904-0023
鵜飼経世　098-930-0659　沖縄県沖縄市高原487　〒904-2171
大城文靖　098-857-1428　沖縄県那覇市小禄1-40-13　〒901-0152
スラッシャー、ランドルフ　098-836-8128　沖縄県那覇市国場671-5　エンゼルハイム502　〒902-0075
平良昌弘　098-945-1581　沖縄県中頭郡西原町幸地315-9　坂田ハイツB-53　〒903−0116

海外

■ アメリカ

シアトル
中津泰明　206-232-4400　8031 84 th Ave. S. E. Mercer Island, WA 98040 USA
福元謙六郎　206-365-3481　10728 11th Ave. N.W. Seattle, WA, 98177, USA
サンフランシスコ
勝子Stover　415-499-8436　2151 Elderberry Lane San Rafael, CA 94903,USA
ロサンゼルス
田中正純　714-669-8991　8 Glorieta West, Irvine, CA 92620, USA
杉山　明　310-377-6850　40 Via Capri, Rancho Palos Verdes, CA 90275, USA
ワシントン
恩田正徳　301-468-1534　320 Lorraine Dr, Rockville, Md. 20852, USA
Basilio & 文代 Teixeira　301-230-2747　1702 Lorre Dr., Rockville, MD. 20852, USA

■ カナダ

オタワ
井出和雄　613-591-0654　197 Equestrian Drive, Kanata, Ontario, K2M1K7,CANADA
トロント
南場良光　416-766-0598　210 Keele St. Toronto, Ontario, M6P2K2,CANADA
バンクーバー
久田達也　604-929-8767　1969 Cedar Villeage Cres, North Vancouver, B.C.,V7J3P5　CANADA

■ タイ

バンコク
永森敏江　66-02-261-1401　Rm12, B2 D.S. Tower 1, 98／111 Sukhumvit 33, Klongtoey, Bangkok, 10110 THAILAND

移動があったときは 西軽井沢国際福音センター　0267-32-6400 羽石まで

Unser HERR lebt
主は生きておられる vol. 14　定価100円（本体95円）

主は生きておられる 第14号
定価100円（本体95円） 2008年7月1日初版

初版編者　ゴットホルド・ベック
編集スタッフ　清水洋一　福留伸子　石塚稔成　石塚優子　岩本範子　井野文雄　井野訓子　島山智恵子　清水まみ　（査読）酒井千尋
デザインスタッフ　上野文子　石黒郁彦　小林珠美　江藤絵里　坂口寛子
写真　ゴットホルド・ベック　鈴木力　高田知範
イラスト　石黒郁彦
題字デザイン　飯守恪太郎
印刷　新生宣教団
製版　株式会社 陽成社
発行所　キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。ご協力ありがとうございました。

[編集後記]

ご覧のとおり本誌は、14号から縦書きの誌面になっています。日本語の文章は縦書きの方が読みやすい、という多くの方のご意見に基づいて変更しました。もちろん横書きにも利点はあります。実際、編集スタッフの中にも「今の時代、教科書も一部で横書きを採用している。若い人はむしろ横書きになじんでいるのではないか」という意見がありましたし、ローマ字や数字入りの文章は横書きに向いています。しかし、聖書を含めて、日本語の出版物の大部分が縦書きを採用している現状などから、国内ではまだ縦書きを望む人の方が多い、と判断しました。あわせて、文字も少し大きくしました。これらの変更について、皆様のご意見ご感想をお寄せいただければ幸いです。なお、連載メッセージ「聖書は何と言っていますか」は9号で1回目を掲載した後、中断していたものです。全5回を予定しています。「インターネット配信」の記事は野口修さんに書いていただきました。